

続・明治期に渡米した房総アワビ漁師たちの源流

～小谷源之助・仲治郎兄弟と金澤屋の人びと～

NPO 法人安房文化遺産フォーラム 愛沢 伸雄
(房総アワビ移民研究所 研究チーム)

1. 小谷仲治郎の帰国と排日（日本人移民排斥）問題	1
2. 小谷源之助が書いた「陳情書下書き」	2
3. 源之助の三男省三の証言	5
4. 小谷兄弟の渡米と岸上鎌吉「あわび研究」	8
5. 魚類学者 D. S. ジョーダンや B. ディーンと日本	11
6. 野田音三郎や井出百太郎、森俊肇らの採鮑漁業	17
7. 排日問題とモントレイの鮑漁への規制	24
8. 大島四郎著『安房の潮左為』からみる小谷兄弟と A. M. アーレン	30

1. 小谷仲治郎の帰国と排日（日本人移民排斥）問題

仲治郎は、兄源之助とともに渡米後、鮑の採取・加工・販売に手腕を発揮し、共同経営者のA. M. アーレンの協力を得て、一大事業をなし遂げてきた。1897（明治 30）年に渡米した仲治郎は、明治 39 年（1906）11 月 9 日、日本郵船香港丸でサンフランシスコを出港し、27 日に横浜港に着いた。以来、亡くなるまで再び渡米することはなかった。

乗船名簿には仲治郎とともに潜水夫の山本梅吉や鈴木治郎松の名が記されていたが、1906（明治 39）年に仲治郎が帰国した理由は何であったのだろうか。この時期、米国の排日（日本人移民排斥）運動では大きな問題が起きていた。1906（明治 39）年 4 月 18 日早朝のサンフランシスコ大地震があり、米国の主要都市で起こった自然災害では被害が大きいものの一つといわれ、約 3 千人が亡くなり 22 万を超える人びとが家屋を失ったという。この状況のなかサンフランシスコ当局は、10 月に日本人学童隔離条例、つまり日本人学童の公立学校入学を拒否し、他のアジア人と同じ学校の通学することを命じてきたのである。米国の日本人を憤慨させる出来事として、日米両政府には大きな外交問題となっていた。

日露戦争後、米国本土への日本人移住者が増加し、カリフォルニア州を中心に排日問題が深刻化しており、日米の政治情勢が揺れ動いているなかでの仲治郎の帰国であった。そこにはポイントロボス缶詰会社の経営を継続させていくために器械式潜水による採鮑業を維持しなくてはならないという強い思いがあっただろう。排日運動のもとで年々厳しくなっていく入国条件のなかで、高度な潜水技術を身に付けた潜水夫を送り込んでいくことが、安定した鮑生産のために必要があった。現地の状況を最もよく知っている仲治郎自身が日本から定期的に要員を送り込むことがどうしても必要であった。

日米両政府とも早急な対応が求められていたので、1908（明治 41）年に日米紳士協約（駐米公使高平小五郎と国務大臣ルート間の紳士協定）を交わし、日本は労働者への新規旅券発給を停止することに合意した。自主規制するなどの妥協によって一時的に問題をかわしていったものの、排日運動はその後も高まっていた。

当時、父清三郎は脳症のために村会議員を辞職（明治 40 年 3 月）する事態になり、母たよが金澤屋の営業を一人で担っていたことは跡取りの源之助にとって心配の種であっただろう。仲治郎の帰国は源之助の代わりでもあり、別居状態にあった妻美わとの関係のためにも帰国は求められていた。1910（明治 43）年 7 月 27 日清三郎（65 歳）は亡くなっている。1912（大正元）年 9 月に「根本・布良海岸線境界問題」で行政訴訟となり、仲治郎は裁判に関わっていく。翌 1913（大正 2）年、千田漁業組合長に就任するが、裁判は続いており、仲治郎の奮闘で、1915（大正 4）年 2 月、根本漁業組合の正当を確認させ、長年にわたる紛争を解決に導いたのであった。

仲治郎は千田漁業組合において器械潜水夫の訓練・育成をし、モントレイのポイントロボス缶詰会社の経営のために潜水夫を送り込むことが求められていた。それは組合員の収入を確保していく一つでもあったので、渡米要員の準備をしたと推測される。そして、1915（大正 4）年の 7 月頃、源之助から潜水夫の派遣要請があった。日米の紳士協定のもとで日本人労働者の渡米が禁止され、特別の事情以外、旅券発給許可はなかった。

厳しい渡航環境のなかで源之助から仲治郎宛てに書簡が届き、サンフランシスコ総領事館への対応が書かれ、旅券発給の手続きの際、仲治郎から総領事代理宛てに陳情書を提出する旨の依頼があったのである。

2. 小谷源之助が書いた「陳情書下書き」

1915（大正4）年頃に書かれた源之助の陳情書の下書き（以下「陳情書」）と書簡のそれぞれの写しが、平野家住宅（仲治郎旧宅）に残っていた。源之助自身が書いた文書の内容であり、とくに1897（明治30）年の渡米当時の様子が記された極めて重要な資料である。

この「陳情書」は、カリフォルニア州モントレイにあるポイントロバス缶詰会社の小谷源之助が出願人となり、桑港総領事代理の沼野安太郎宛に器械潜水夫として地元七浦村字千田の渡辺勘治（明治4年生）と高橋春治（明治5年生）との派遣を陳情する内容である。渡辺と高橋は「…弊社採鮑潜水夫として長く勤務…家事上…高橋春治は明治35年4月帰国し、渡辺勘治は明治41年12月帰国…今回再び弊社潜水夫として再渡米致させ度…」という旅券発給の依頼である。これまで「…採鮑船式艘を使用し、潜水夫4名或いは3名を以て営業…」しているが、「…潜水夫之一名…症病之為め…帰国…」したので、現在2名で採鮑漁をおこなってきた「…採鮑船壹艘に対し一名之潜水夫にては、一日八・九時間之潜水は全く過激の労働に有之、長く経続することは不可能…万一病氣之場合に於いては、数名之乗組水夫を要する採鮑船は、空しく営業を停止休業すること…」になったという。そこで「…損失を来し…罐詰製造方に対し候ても、一定の労働者を要すること…採鮑船壹艘のみでは不足、経費之点に於て多大之相違を生じ、到底営業難…全く営業に差支、如何にも困難…」になり、どうしても会社存続のためには不足の器械潜水夫派遣が必要と訴えている。

この「陳情書」では源之助自らがモントレイでの採鮑業の始まりを次のように記載している。「…此事業は私明治三十年、始めて当加州に於て潜水器を以て採鮑開始せしも、米国人之是れを食する者無之為め、輸出向けとして支那行き乾鮑製造罷在候処、日々多額之採鮑は、米国人と利益の関係無之為、屢々採鮑禁止を称える者有之候も、其都度多額之運動費を支出し、以来三十年営業経続仕来候。…」と述べている。

ではどうして排日運動が高まっているなかで継続してきたのであろうか。「…去れば当国に於て採鮑は、米国人と利益の関係を有するにあらざれば、長く営業不可能と存し、米国之食料として嗜好すべき一種の鮑缶詰を製出し、尚又料理店に使用を勧める等、種々なる法々を講せし結果…」と述べて、「…米国人と利益の関係を有する…」ことが重要であり、鮑缶詰会社がA.M.アーレンとの共同事業としての意味があったのである。

その後の「…近来に至りては一般食卓用品として、採すると同時に罐詰を除くの外一切海外輸出を禁止し、米国人に対して十分供求せしめんとするの傾向を来し、既に当年之加州々会に於ける採鮑案は、従前一ヶ年中三ヶ月之禁漁期を、僅に一ヶ月の産卵期を除き採鮑せしむる等々、寛大なる法律を制定するの有様に立至り候…」と、排日的な移民法が強化されるなかで採鮑漁への対応があった。

なお、仲治郎に「陳情書」と書簡が送付された1915（大正15）年は、カリフォルニア州議会で州内での鮑の乾燥や鮑貝殻・肉の州外出荷が違法とされている。源之助は排日運動の高まりがあり様々な困難な状況であっても「…日本人独専之採鮑業、実に将来有望之事業に有之候付き、何卒事業経続に苦心罷在候…」と、サンフランシスコ総領事館から事業継続の支援を求めているのである。

当初から採鮑業が乾鮑の輸出のためであり、全く「米国人と利益の関係」がなかったため、現地人のアメリカ人からは「採鮑禁止」と訴えられていく。しかし、「採鮑は、米国人と利益の関係を有するにあらざれば、長く営業不可能」と認識させたのは、当時の源之助とA.M.アーレンという人物の友情溢れる共同事業なしに、源之助・仲治郎の鮑漁と鮑缶詰との事業成功はなかったといえる。

「食料として嗜好すべき一種の鮑缶詰」だけでなく、「料理店に使用」という鮑を新しい食文化にし

たポップ・アーネストという料理人の鮑肉をステーキのように調理した画期的なものであった。1906（明治 39）年頃、モントレイの料理店の一品にしたポップ・アーネストは、アメリカ人たちが「一般食卓用品」として「米国人に対して十分供求せしめんとするの傾向」にし、第一次世界大戦で米政府が肉食から魚食にとの呼びかけも水産物の需要を高めていた。源之助の「陳情書」はそのよう時期に書かれていたので「日本人独専之採鮑業、実に将来有望之事業」と誇らしげに記載している。

ただ、日本から送られる熟練の潜水夫の存在なしに、鮑生産は進まなかったのである。日本政府は自主的な移民規制をおこなうことで、排日（日本人移民排斥）運動の緩和につなげようとし、1908（明治 41）年の日米紳士協定で日本人労働者の旅券発給を停止しているなかで源之助の要望は、日米政府からも特別の許可が必要であった。カリフォルニア州の排日勢力は日本人の事業や生活に制限を加えようという運動に広げており、モントレイ地域でも組織化された排日の動きは激化していった。州議会においても多数の移民排斥法案が提出され、日本人会のロビー活動が活発に繰り広げられた。源之助が「陳情書」に書いたように「…既に当年之加洲々会に於ける採鮑案は、従前一ヶ年中三ヶ月之禁漁期を、僅に一ヶ月の産卵期を除き採鮑せしむる等々…」と、さまざまな運動で鮑漁禁止法を回避させる対応をとることができた。共同経営者としてアーレンや源之助は、日本から潜水夫を渡米させる特別な対応を見つけていったのであろう。

なお、野田音三郎も排日運動のなかで、困難を抱えて乗り越えていたことが、加藤十四郎著『在米同胞発展史一附・名士列伝』（博文館・1908（明治 41）年）に記載されている。「…支那人、以太利人等邦人の為に職業を奪はれんことを恐れ、君等に對して陰謀を企てしが、蘇格蘭人ジャックスなる義士君に警戒する所あり、君彼に告ぐるに日本人が彼等と競争するの意なき旨を以てす、於是該白人紳士は進んで仲裁の勞を取り幸に事なきを得たり、由來君は白人と利害を異にするの不得策なるを看取し、二十年來此主義を保持せるため、未だ一たびも白人と口隙を生せしことなく、却て白人の為にモントレイ商業會議所員に推薦せらるるに至れり…」と身の危険を感じながらもアメリカ人との交流を続けて支援を得ていたようだ。

1981 年 5 月に源之助の三男・省三がインタビューのなかに、当時の潜水夫について貴重な証言をしている。源之助の「陳情書」と省三の証言を重ねると、当時の渡米潜水夫の動きがわかる。次章では、省三証言を取り上げている。

「潜水夫についてもっと教えてもらえますか。彼らは留まるつもりで来たのですか、来たときはどんなようすで、実際にはどのやってそこに来たのですか。」との質問に「…私たちはモントレイのクルーとは少し違っていました。ここポイントロボスで鮑事業に参入するためには、日本から熟練した働き手、潜水夫を連れてくる必要…ここへ連れてくる唯一の方法は彼らを熟練労働者として分類する…熟練労働者で…潜水夫だった…そして彼らはやって来ました…5、6年ごとに彼らは帰国せねばなりません…そして再び戻って…これは移民法によるもの…彼らは無期限にここに留まることはできず、一度帰国し、そして再び戻って来る。事業を継続させるために何人かが日本に帰り、また何人かが戻って来るということでした」

そして、「潜水夫について話しをするのはいかがでしょうか。彼らは居残ることができませんでしたね。あなたに身近なこれらの法律は何ですか。」という質問に「…政府はビザを、永住ビザを発行しようとしません…ここへ来て 4 年ないし 5 年経つと帰国せねばならず、ビザを更新した戻ってくる。これが 1929 年、30 年ころまで継続的に続き…そのころ恐慌がやって来て私たちは缶詰製造業を辞めざるを得ませんでした。」と語っている。

省三は 1908 (明治 41) 年生まれなので、16 歳前後で鮑漁を手伝ったとすると 1924 年頃であり、源之助が亡くなる 6 年前である。当時、排日運動の絶頂期であり 1924 年の移民法制定は、日本人などの帰化不能外国人は移民として認めないと、突如 1908 年の紳士協定も破棄してきた時期である。潜水夫の渡航は大きな制約を受けていたはずであるが、省三がいうように、日本から潜水夫を「連れてくる唯一の方法は彼らを熟練労働者として分類」として、米国側も許可する特別な立場での旅券申請が可能であったことがわかる。

3. 源之助の三男省三の証言

仲治郎が帰国した翌々年、1908（明治 41）年 5 月 16 日に源之助の三男・省三が出生している。1981（昭和 56）年 5 月、74 歳の省三がインタビューに答えている。その概要をみると源之助の鮑事業が始まった経緯を以下のように語っている。「1895 年…野田氏が木を切るためにモントレーに来ましたが、木を切ることは重労働で…周りを見てみると鮑漁が優れたビジネスになると思い…日本政府に鮑潜水漁のやり方などについて手紙を書いた…そこで日本政府は慶応大学に行き 1883 年に卒業した私の父小谷源之助に連絡を取り…彼は海洋生物学を専攻していたので、政府は彼にモントレーに行って鮑漁について調べるよう要請…1896 年に彼はモントレーに行き…海岸のあちこちを見てポイントロボス…に惚れ」込んだという。

まず、野田が 1895（明治 27）年日本政府に「鮑潜水漁のやり方」などについて手紙を出したという証言は、これまでなかったものである。この証言を含めて野田音三郎が鮑漁業を始める際にどのような対応であったかを別章において検証してみたい。

そして、源之助の学歴が 1883（明治 16）年の慶応大学卒業は仕方ないにしても、省三には「海洋生物学を専攻」と本人が話したならば、どこかの学校で聴講したようなこともあるか。いずれにしても学歴の問題は省三の証言からか、今日まで誤って伝えられているのは確かである。

渡米鮑漁師の歴史では、源之助が 1897（明治 30）年の 9 月 9 日、「渡航先桑港」「渡航主意水産業調査」という旅券発給を得て、汽船ドーリック号で 9 月 14 日に横浜港を出航、9 月 29 日にサンフランシスコに到着し、仲治郎と男海士 3 人は、12 月 3 日に渡航し源之助と合流したとされる。そして、野田のもとで器械式潜水による採鮑漁や乾鮑加工業に従事したという。

省三の証言では「…最初パシフィックグローブへ行き、そこに 1 年住み…ポイントロボスへと出て来て鮑漁を始め…当初、2、3 人の潜水夫を連れて…素潜りを行い…しかし水は大変冷たく…彼は父親に、つまり私の祖父に手紙を書き…祖父は海産物を商い、ヘルメット潜水、深海潜水用具類を所有していたので、彼はそれらをこちらに、その装置を全て、深海潜水、空気ポンプ、古いポンプではあったが、それにホースをこちらへ送り…鮑漁を始めた…」と語る。源之助は父・清三郎に手紙を書き、「深海潜水用具類」や器械式潜水「装置」を送ることを依頼したという、これまでない極めて具体的で重要な証言である。

次にどんなところに住んで生活したかについて、省三は「…私たちのクルーと家族はこの湾の向こう側の糸杉の裏に住み、そこに小さなコミュニティを作り、クルーとその家族はそこに住み、炊事場などもありました…そして缶詰工場はこの真下の今は駐車場になっている場所にあり、缶詰工場の倉庫などもあり…そこに小さな栈橋を持ち、そこで鮑を開き、船は湾の中へ出る洞窟に停泊…ダイビングボートを 2 隻所有し、そこで彼らは潜り、全ての装備がダイビングボートに積んであり、そして 1 隻がダイビングボートを引き回し…当時ダイビングボートにはエンジンが付いておらず…大きな方の船がダイビングボートを引き、沿岸を行ったり来たりして鮑のいる場所へ行き…鮑を取り込み、それをふ頭におろし、そこでは殻がきれいに外され、下準備がなされ…まず初めに、鮑は干され、干された鮑はハワイや中国へ送られ…後になって、1902 年…規制がかけられ、鮑はアメリカ国外に輸出できない法律が通された…そんな訳で、私たちは缶詰製造業に入らざるを得ませんでした。缶詰工場はこの真下にあり、工場で 10 名くらいを雇い…缶詰は国内市場用にサンフランシスコとロサンゼルスへ輸送…」と語っている。

初めは乾鮑にしてハワイや中国に送られたが、1902（明治 35）年の鮑製品輸出禁止の結果、「缶詰製造業に入らざるを得ませんでした」と述べ、小谷兄弟に大きな影響を与えた A. M. アーレンの

話はなかった。他の漁師との競争はどうであったかを問われた時に、「…ここでは唯一のアワビ事業者で…唯一のアワビ缶詰製造業者…しかし、1913 年ころ、他の人たちがモンレーから来て鮑を求めて潜り始め…鮑産業の最盛期にはおよそ 16 隻の船がモンレーで漁…」の話とともに、事業を立ち上げた際の苦勞として、「…父が缶詰製造を始められた理由は…アレクサンダー・マクミラン・アーレンは…このあたりの全ての土地を所有…父はアワビ缶詰製造業への参入を望んで…アーレン氏に話しをし、彼はここで缶詰製造業を始めようと言ひ…父はここに入って来てアーレン氏と共にビジネスを始め…」と、A. M. アーレンの存在があればこそ鮑事業があったと語っている。当時の状況において日本人と白人のアーレンが固いパートナーシップを築いたことは極めて稀な姿と述べている。「…パートナーシップでは父が全てを運営し、事業を引き受け…アーレン氏が土地の所有者であることから…彼の許可を得て缶詰工場などを立ち上げ…」と、その経緯が語られ「そのようなパートナーシップ…所有権に関してはまれなケース…」と、省三は A. M. アーレンという人物を高く評価している。

これまで調査してきた平野家文書には、米国との交流や取引に関わる 2 通の書簡があり、内容から 1904（明治 37）年の源之助の後妻ふくの渡米に関わる書簡と思われる。源之助がわざわざ川名宛に「…米国小谷氏之書翰着、拝読仕候処、アーレン氏之御尽力アツテ是迄列（例）之無キ取扱ニテ無事上陸致候由…」と報告しているのは、すでにアーレンのことを川名が知っていたからであろうか。時期から考えて森薬舗の護俊肇は、1900（明治 33）年半ば頃に森合名会社を設立し、潜水器採鮑事業のために源之助・仲治郎兄弟に資金調達しようとしたが、排日機運が高まるなか、日本人の採鮑禁止法案が審議される困難な状況になっていた。そのなかで源之助・仲治郎兄弟の事業に理解を示したアーレンが、採鮑業の名義人になったことで禁漁を免れることができた。

1902（明治 35）年、アーレンの出資と名義により共同してポイントロバス缶詰会社を設立し、事業拡大を進めていった。前述の書簡は 1904（明治 37）年に源之助が日本にいる後妻のふく（22 歳）と長男英雄（1 歳）の二人をモンレーに呼び寄せたものであり、アーレンが当局に渡米への口利きをしたことで、前例がない取扱いのなか無事渡米できたと書かれている。当時、日本人移民の排斥が高まっていたので、公私ともに小谷兄弟を支援するアーレンという人物がいなければ、その後の事業継続ができるかどうかかわからない状況のなかで、日本にいる川名又之輔らの関係者は米国の源之助たちの活動を支援していたと思われる。A. M. アーレンについては別章でさらに取り上げたい。

ところで、議会での鮑漁禁止の動きについて「鮑漁を全面的に禁止しようとしたことがあり…1907 年、ちょうど私の父が始めようとした後、彼らは私たちがもうこれ以上鮑を缶詰にしたり干したりできない法律を議会に出そう…しかし、私の父はボスタとかいう名前の法律家にこの法律と闘ってもらい、議会との数年の戦いの後、父はこの件を勝ち取り、私たちは鮑をとり続けることができる…」と語っている。

1940（昭和 15）年に出版された『在米移民日本人史』には、「…邦人漁業家らは再びベスカを弁護人としてこれに闘ふ一方小谷は同法案に反対の白人 342 名の署名をとつて郡参事会に訴へ或は郡参事員並びに英字新聞記者を招いて海上ピクニックを催し、その眼前に於て採鮑の実況を見せて、鮑採取の無害なるを説き…」という一文があり、「…ベスカを弁護人…」と、インタビューの「…ボスタとかいう名前の法律家…」と、日本語にすると人名は違っても英語の発音では **Beska** と **Bossa** で、同一人物の人名ではないか。

『在米移民日本人史』は、源之助と一緒に鮑漁をし、鮑漁の開始時の話も聞いていた当時 32 歳

の省三の証言も記述のベースになって編纂されたとも考えられる。以後 40 年経った時のインタビューでも、多少の記憶違いがあり曖昧な部分があっても、大筋で大変重要な証言であることに間違いはない。

4. 小谷兄弟の渡米と岸上鎌吉の「あわび研究」

『水産調査報告（第四巻）第貳冊』（農商務省水産調査所 明治 29 年）の水産調査所技師理学博士・岸上鎌吉の論文『あわび研究第二報』は、極めて重要な内容である。

この論文の「介殻成長ノ度」の項には、「…明治廿六年八月技手見習佐々木沖太郎ヲ安房國根本ニ遣ハシ…明治廿七年十二月潜水夫ヲシテ高塚出シテ根ニ放チ置キタル貝ヲ…」とある。この中の「佐々木沖太郎」という人物は、新潟県出身の水産伝習所第 1 回生で明治 23 年 2 月に卒業し、明治 26 年 8 月根本に調査に来た時には、水産調査所の技手見習をしていた。佐々木はその後、愛知県水産試験場技手から新設された千葉県の水産試験場の技師となり、場長などを勤めて水産試験場の基礎を固めたといわれる。

論文『あわび研究第二報』の「發生及産卵期」には「明治廿六年十二月初旬佐々木沖太郎ヲ根本ニ遣ハシあはびノ産卵ヲ…十二月廿三日…十尋ノ處ニテあはび十一個ヲ…廿六日…六七尋ノ處ニテ二十餘個ノあはびヲ…」と、潜水器によって採鮑したが産卵時期の調査としては遅れたという。そこで「…明治廿七年ニハ前年ノ如ク産卵期ニ後レサル様…出發期日延引シ十二月十七日ニ出發スルヲ得タリ不幸ニモ出發期日後レタル上ニ房州根本ヘ到着ノ日ヨリ四日間海上荒レテあわびヲ採集スルヲ得サリシ…」とある。

実はこの時期、佐々木沖太郎による調査活動のことがたよの書簡に書かれ、佐々木からの書状も受け取っている。たよから清三郎宛の十二月六日付書簡【61】には、「…さゝきおき太郎様今日御出ニ相成候付、一寸申上候…」とあり、この書簡は明治 27 年の 12 月 6 日とわかり、源之助の「逃亡」という出来事の余波のなかにあつて、金澤屋は農商務省水産調査所への協力にあたっていた。佐々木沖太郎から清三郎宛の 17 日付書簡【38】をみると、「此間ハ種々御世話様に相成、難有奉謝候、出立ノ日風強カリシモ出船致ス由に付、全日十一時頃出帆、随分波強ク船ノ傾キ甚シク、乗組ノ人ハ皆吐瀉シ、幸に小生ハ何レモ無之候へ共、只室内ノキタナキニハ閉口致し候、何レノ地ヘモ立寄ラズ、三時浦賀へ着、五時着京仕候…」とあり、佐々木は 12 月上旬に岸上鎌吉より先に来て調査活動をして帰京するが、「…上官ノ命ニ依リ又々御地へ出張ヲ命ゼラ■、今月二十日出立仕候、今度ハは調査第一部長岸上鎌吉氏全行罷在候に付少々都合ニハ御座候へ共、養寿院ニ宿泊仕ル積リニ御座候…」(農商務省便箋)と、再び根本への出張となり、上司の岸上鎌吉に同行して宿泊は養寿院にしたいと述べている。

仲治郎が伝習所で動物発生学を学んだ「岸上鎌吉」という人物について紹介したい。愛知県知多郡横須賀村出身で、1867（慶応 3）年に出生し 1929（昭和 4）年に没した、日本の水産学黎明期の水産学者である。水産上の重要生物を中心に日本に於ける動物分類学の基礎を築いた動物学者の一人として位置づけられている。1880 年に愛知県中学校から 1883 年に東京大学予備門に進学し、帝国大学理科大学動物学科入学。日本の動物学の第一人者箕作佳吉教授に師事し 1889（明治 22）年に卒業し、その年の 11 月に水産伝習所が創立されたことで、発生学の教員として採用され、内村鑑三や岡村金太郎らが同僚であった。

その後、1891（明治 24）年農商務省水産局技師に任命され、東京湾を始め日本各地の水産生物の分類・分布・発生調査及び繁殖（養殖）技術の研究に従事したが、とくに鮑の調査研究では日本の権威であった。

ところで、水産政策の要である農商務省水産局は 1885（明治 18）年 2 月に設置されたものの、1890（明治 23）年 6 月に農務局に統合される形で廃止された。この措置に不満をもった水産業界では一致して反対したが、農商務大臣に復活を訴えても戻らなかった。その後、水産局に代わるべ

き水産調査所が計画され、1893（明治 26）年 4 月に農商務大臣の管理下で水産調査所が設置され、水産に関する調査事務をおこなうことになった。それとともに 13 名の委員で水産調査会が付設されている。2 年後に改正された官制では職員の構成は所長、技師（定数 3 人）、技手（定数 14 人）、書記（定数 4 人）に改められ、所長は農務局長が兼務していたなかで、水産局設置の要望が高まり、1897（明治 30）年 6 月になって水産局は再設置されたのである。

農商務省に在職していた岸上鎌吉は、1893（明治 26）年に農商務省に水産調査所が設立されると主任技師となり、とくに金澤屋の協力を得て根本で鮑の調査研究をおこなった時期、岸上の助手であった佐々木沖太郎からの礼状や依頼の手紙が平野家文書の中にあった。つまり『水産調査報告（第四巻）第貳冊』（農商務省水産調査所 明治 29 年）の岸上論文『あわび研究第二報』の内容と重なっていたのである。この事実は金澤屋と農商務省との繋がりを示している決定的なものといえる。

なお、『動物學會』第七卷（明治 28 年 3 月 15 日）には「東京動物學會 二月十七日午後二時ヨリ理科大學動物學教室ニ於テ同會ヲ開キ岸上鎌吉氏ハ氏ガ昨年房州根本村ニ於テ漁夫ニ命シテ數百個ノ鮑貝ヲ保護培養セシメテ調査シタル結果ト其他數多ノ實驗ニヨル發育中ニ起ル介殼ノ増大介殼ノ加厚殻縁變化呼吸口變化筋肉附着點ノ移動増大ノ割合等ヲ説明セラレ…」とあるので、岸上は論文報告とともに學會でも根本での鮑の調査研究を発表している。

また、『水産調査報告（第三巻）第壹 第貳冊』（農商務省水産調査所 明治 28 年）の水産調査所第一部主任・岸上鎌吉の論文『あわび研究第一報』には「外國ニ於ケルあはび漁業」という重要な小論があり、源之助や仲治郎は熟読して、調査研究のきっかけにしていた可能性がある。そこには「あわびハ七十餘種アリ東洋、南洋、歐洲、及ビ北米太平洋岸ニ饒産ス…北太平洋岸ニテハ桑港近傍トス…米國水産調査報告ニヨルニ北太平洋沿岸ノあわび漁業ハ千八百七十九年ニハ肉及ビ介殼ヨリ十三万弗許ノ収獲アリ…千八百八十八年ニハ其収獲實ニ三百万弗ニ達セリ、然レドモ志那人ノ貪慾ナル濫獲シテ遂ニ諸所ノ漁場ヲ荒廢ニ歸セシメタリト云ウ、同國ニテハ介殼ノ方肉ヨリモ貴シ、千八百七十九年ノ報告ニヨレバ介殼ノ一噸四十弗及至九十弗、肉ハ一磅凡ソ五仙ノ割合ナリト云ウ、要スルニ外國あわび漁業ハ未ダ幼稚ニシテ捕獲法等ニ至リテハ未ダ本邦ノ右ニ出ヅルモノナキガ如シ、種類ハ本邦産ノモノト異ナレリ。明治廿七年十一月」という内容である。

ここで注目されるところが「北太平洋岸ニテハ桑港近傍トス…米國水産調査報告ニヨルニ北太平洋沿岸ノあわび漁業」という部分で、岸上がいっている「米國水産調査報告」が存在するとなれば、当然、源之助や仲治郎らが目を通して、渡米後の調査研究に活用したはずである。この時期に出版された『輸出重要品要覧 水産之部 乾鮑』（農商務省農務局・明治 28 年）の項目「十四 外国産地ノ状況」の中の「北米合衆国」には、「…合衆國漁夫調査報告中ダヴィド, エス, ジョルダン氏ノ説ヲ摘譯シタルモノ…」とあり、米国水産業の資料としてスタンフォード大学の動物学者ディヴィット・スター・ジョーダンの説を引用しているので、魚類の専門家であるジョーダンは、米国水産局でおこなっている調査に関わっていることがわかった。

その調査の一つが『1880 年、ディヴィット・スター・ジョーダンが太平洋沿岸の漁業調査の一環として、アメリカのために作成した報告書』（『the report prepared by David Starr Jordan as a part of his survey of the fisheries of the Pacific Coast in 1880 for the U.S.』）であった。この報告書においてジョーダンがモントレーとポイントロボスの様子を記載していたので、一部を紹介する。「…モントレーでは、ハグフィッシュの一種が大量に見つかった。ウナギのような形をしたこの生物は、体長 1 フィートほどのプラム色のぬるぬるした生き物…モントレー地方では、

カーメル湾を調査…サイプレス・ポイントには、古代の気高いモントレイ・サイプレスの木立があり…湾の南を囲むポイントロボスだけに自生…ロボスとは「狼」のことで、吠えるアシカに付けられた名前である。…モントレイ湾と太平洋の素晴らしい景色…岬の中で最も美しく、印象的なのはポイントロボス…」とある。ジョーダンがカリフォルニア州などを地誌的に描きながら、漁村の様子や漁業関係の調査をまとめたもので、モントレイはもちろん、源之助・仲治郎が居住したポイントロボスも訪れている。この報告書はその後の水産局の基本的な文献になっていく。

その後、米国漁業・水産委員会は報告書『米国の漁業および水産業』（米国漁業・水産委員会委員長および第10回国勢調査管理者の協力により準備作成・1887年）を出版するが、そこに注目すべき内容がある。「…鮑漁業に関する最新の情報と部分的な統計は、国勢調査局のディヴィッド・スター・ジョーダンとルッキングストン両氏の1879年の調査によってもたらされた、鮑の生産地はサンフランシスコから南境までのカリフォルニア沿岸、下カリフォルニアの半島とメキシコの対岸に及んでいる…別表のサンディエゴ郡とサンフランシスコに計上されているものは、大部分がメキシコ水域に由来…」とあった。

前述した1879年の調査資料が掲載されて、そこにはモントレイなどの鮑漁などが記述されていただけでなく、報告書には鮑漁業として取り上げられ、そのうえに「別表」として「1879年鮑漁の概要数」が表記されていた。表中には7つの郡名とそれぞれの郡の鮑肉（重量ポンド・売上\$）鮑貝殻（重量ポンド・売上\$）合計（売上\$）の記載がある。郡名はサンディエゴ・ロサンゼルス・ヴァンタナ・サンタバーバラ・サンルニスオビスポ・モントレイ・サンフランシスコであり、まずモントレイ郡をあげると、鮑肉 12,000 £ 600\$・鮑貝殻 60,000 £ 15,000\$となっており、合計売上は6番目で、説明をみると中国人コミュニティがあつてクルス島やサンタローザ島で採鮑しているが、鮑の生産量は少ないと書かれている。生産トップのサンディエゴ郡は、鮑肉 280,000 £ 14,000\$・鮑貝殻 1,400,000 £ 30,000\$で、合計売上 44,000\$である。ここは鮑漁業が最も盛んで中国人たちの会社を中心になって採鮑しており「…1880年1月の第1週だけで彼らの売上は10トンの貝殻で450ドル（当時）、さらに保存した肉はサンディエゴ市では1ポンド5セント…」と記載されている。

これら2つの報告書は、前述した岸上鎌吉が論文で報告していた「北太平洋岸ニテハ桑港近傍トス…米國水産調査報告ニヨルニ北太平洋沿岸ノあわび漁業」の「米國水産調査報告」や、『輸出重要品要覧 水産之部 乾鮑』（農商務省農務局・明治28年）の「…合衆國漁夫調査報告中ダヴィド、エス、ヂョルダン氏ノ説…」の「合衆國漁夫調査報告」などの内容を裏付けるものではないかと推察される。当時の農商務省水産調査所では、米国政府に関わる漁業や水産関係の報告書やディヴィッド・スター・ジョーダンの論文などを翻訳して、日本の漁業や水産政策に活用していたと思われる。魚類学者ジョーダンと農商務省、東京帝国大学との調査研究の交流関係があつたことを忘れてはならないだろう。

5. 魚類学者 D. S. ジョーダンや B. ディーンと日本

スタンフォード大学の学長であったジョーダンとは、どのような人物であったか。1851年、ニューヨーク州ゲインズビルで出生。両親はジョーダンを農場で育てたり、地元の女子高校に通学させるような教育環境にしていたという。1872年にコーネル大学で植物学を学んだ後に、ハーバード大学教授ルイ・アガシーの自然史学校で学んだことから魚類学を専攻することになる。1879年にインディアナ大学ブルーミントン校自然史学部で動物学教授となり、1885年からは34歳で全米最年少の学長となった人物である。そして、1891年スタンフォード大学の創立者からスカウトされて初代学長となり重要な教育環境を作り上げていった。1913年から4年間総長を務めている。

大学の管理者になった後も研究と教育を続けたジョーダンは、各地の調査活動を続け 2500 種以上の魚を発見し、そのうちの 1085 種に名前を付けたという。19 世紀から 20 世紀初頭にかけて最も影響力のあったアメリカの魚類学者となった。米国産魚類研究の集大成である北米・中米の魚類報告書を完成させた後、極東の魚類に強い関心を持ち、1900 (明治 33) 年頃から日本産魚類研究にも大きな影響を与えていった。

スタンフォード大学の学長であったジョーダンは、モンレーの地に、ポプキンス臨海実験所を設立している。スタンフォード大学のHPには、ジョーダンが学長としての最初の年に、前述したルイ・アガシーのマサチューセッツ州バザーズ湾ペニキーズ島における自然史学校の意義を高く評価したことで、海洋研究所の設立に着手したという。まず施設に適した場所のために学部の教授任命とともに海洋生物ステーションの設立計画立案をつくった。1891年動物学および生理学部門の長となったギルバートとジェンキンスは、太平洋岸に沿った可能な場所としてモンレー半島の海岸線を選んだ。この地域こそ 1880 年に米国水産局の漁業調査でジョーダンやギルバートは訪れた馴染みのところであり、1891年にスタンフォード大学の学長となったジョーダンは再びモンレー半島の海辺の村パシフィックグローブを訪れたのである。

ここから米国本土の東西の海岸にあるマサチューセッツ州ウッズホールの海洋生物学研究所とカリフォルニア州パシフィックグローブのホプキンス臨海実験所の 2 つの研究所は、アメリカだけでなく世界の動物学の進展に大きな貢献をしてきた。ホプキンス臨海実験所では 1900 年前後の 25 年間のうち、1903 年と 1904 年以外の 23 年間、研究者と学生たちのために夏季 2 カ月程、生物学や動物学、植物学、生理学などの指導コースが実施された。

生物学の定期的な夏のコースに参加した学生に加えて、スタンフォード大学のメンバーだけでなく他の機関から研究者が来て多数の科学的な研究がおこなわれた。コロンビア大学のバッシュフォード・ディーンとエール大学のウェズリー・コー、カンザス大学のアイダ・ハイド、シカゴ大学のジャック・ローブとチャールズ・マニング・チャイルドなどが訪れて研究に携わっていた。

なかでも注目したのはコロンビア大学のバッシュフォード・ディーンという人物である。「…1899年の夏のある明るいカリフォルニアの日に、私はパシフィックグローブにあるホプキンス臨海実験所のテーブルから窓の外を見て、バッシュフォード・ディーン博士が実験所に…ギンザメの卵 (キメラ) の魚とその成長を追求…」したと書かれていた。ギンザメの最初の卵は同じ夏の後半にカリフォルニアの海岸で得られていたが、ディーンは毎日海岸沖で釣りをし、300 匹以上のギンザメを入手し、これらから 30 匹の雌が卵を含み、卵の中で発達段階が提示されたとの説明があった。

これらの記述から『在米日本人史』(在米日本人会・1940 (昭和 16) 年)にある「…昵懇の紐育コロンビア大学某教授に委嘱して州議会に出頭せしめ『鮑は一年四百万個の卵を生み、この割で繁殖せしめたならば太平洋も鮑を以て埋もれるであらう。斯る繁殖率の夥しい鮑は幾ら採取しても全

滅の憂ひは些かもないのである』と説明せしめ、採鮑禁止の法案は斯くして遂に阻止されるに至つた。(註一前記某教授はその排日運動の当時鮫の卵研究の爲にポイントロバスに來たり、小谷の潜水夫によって卵を採取したことから小谷と昵懇になり、採鮑禁止案に対する苦衷を訴へて教授の後援を依頼したものである) …」と記載のある「コロンビア大学某教授」は、バッシュフォード・ディーンではないかと推察した。

仲治郎の生涯をまとめた大島四郎の『安房の潮左為』(私家版・1983年)には、「…そのアーレンと仲治郎が結びつたのは水産物に関する仲治郎の博識であつたという。あるとき加州海岸で大学生たちが魚介類の調査研究を行つていた。たまたまその海岸にいあわせた仲治郎はその様子をながめていたのであるが、採集された貝の名や分類がわからず学生たちがしきりに論議しているのを見て、彼は明快に説明して学生たちを驚かせた。つづいて不明の魚介類がでると、学生たちは仲治郎の意見をもとめる。仲治郎は迷うところなくテキパキと回答し引率指導の教授たちをして顔色なからしめたという…」と書かれているところがある。この中の「…加州海岸で大学生たちが魚介類の調査研究…引率指導の教授たちをして顔色なからしめた…」とあるのは、モンレーのスタンフォード大学ホプキンス臨海実験所でおこなつていた実習会のことであり、実際にあつた出来事と思われる。当時、源之助や仲治郎と交流のあつた研究者がいて、その人物はホプキンス臨海実験所に関わつていたと推察した。「…鮫の卵研究の爲にポイントロバスに來たり…」と、源之助はいつているのでモンレーのホプキンス臨海実験所に來ていた人物となると、コロンビア大学にいる鮫の研究者は、1899(明治32)年の夏にモンレーの海辺にいた前述のバッシュフォード・ディーンであつたと考えられる。

この人物は1867年ニューヨーク市で出生し、14歳でニューヨーク市立大学に入学し、1886年に卒業後、コロンビア大学に入学し動物学と古生物学を専攻し、1880年代から1900年代初頭にかけてヨーロッパをはじめロシアやアラスカ、日本、そして米国の太平洋岸の科学的な調査研究にあつた。1890年博士号を取得して1904年にはコロンビア大学動物学教授になつた。その後、サメなどの化石魚に関する研究やギンザメの卵に関する研究を発表している。魚類学を専門とするアメリカの動物学者であるとともに、中世と現代の鎧の専門家で、アメリカ自然史博物館とメトロポリタン美術館との同時に役職を歴任していた唯一の人物で、1928年に没している。なお、ジョーダンとともに海洋調査船アルバトロス号で日本に來ている。

当時の米国の水産調査データは農商務省の漁業や水産政策をつくるうえで欠かせないものであつた。水産研究では明治初期より米国からのお雇い教師を招いたり、米国留学したものを官吏にしている。なかでも米国の水産を調査報告した北海道の水産技師伊藤一隆がいる。

伊藤は1880(明治13)年に札幌農学校第1期生として卒業後、開拓使に採用され、北海道庁が発足すると初代水産課長になつた。1884(明治17)年に水産団体である北水協会を設立し、1886年に米国の水産調査のため出張し、巾着網の調査をして試作と試験操業をした。1888(明治21)年には千歳にさけ・ます孵化場を設置するなど、北海道の水産業界の発展に尽力した人物である。

伊藤の調査報告には米国における鮑関係の資料はない。ただ、1890年代頃より、米国水産局の報告書や魚類学者ジョーダンらの報告書に、米国における鮑関係の調査報告が発表されるようになってから、日本側は米国の鮑の水産事情を正確に把握するようになったとわかつた。

米国の研究調査活動は1870年代から国家規模での取り組みになっていく。たとえば日本産魚類についての分類学的研究は、19世紀まではヨーロッパの研究者を中心であつたが、20世紀に入ると主にアメリカ人の研究者がおこなつた。日本の魚類をヨーロッパに紹介したのはテミンクとシュ

レーゲルの『Fauna Japonica (日本動物誌)』が最初で、約 360 種が報告された。日本人によっても日本の魚類の研究が始まり、1884 (明治 17) 年に内村鑑三が 640 種の魚類の学名を記載した『日本魚類目録』(未発表) を作製し、1897 (明治 30) 年には石川千代松と松浦歡一郎が『帝国博物館天産部魚類標本目録』に 1075 種を報告した。

なかでもスタンフォード大学のジョーダンとその弟子たちによって日本産魚類の分類学的研究が精力的におこなわれ、1900 年から 10 年代に約 700 種もの新種が日本から報告された。1904 年、東京帝国大学で魚類の分類学を専攻した田中茂穂が卒業し、ジョーダンやスナイダーとともに田中は、1913 年に『A Catalogue of the Fishes of Japan (日本産魚類目録)』を出版し、1236 種を日本産として報告した。

当然にも農商務省でもその資料とともに、米国へ留学し帰国後東京帝国大学理学部動物学科教授箕作佳吉などを通じて米国側の魚類学者との交流ができた。米国水産局蒸気調査船アルバトロス号の日本周辺海域の魚類調査や『日本産魚類図説』の出版に深く関わった魚類学者ジョーダンは、日本水産界にとって重要人物であり、日本の研究者との関係、なかでも東京帝国大学の箕作佳吉教授や農商務省水産調査所の岸上鎌吉技師などとは、調査研究の親しい交流があった。

ここで玉木存著『動物学者箕作佳吉とその時代』(三一書房・1998 年)などを参考に、東京帝国大学理学部動物学科の箕作佳吉教授とジョーダン博士との関係を辿りながら、日米の研究交流の一端を見てみたい。

箕作佳吉は、1858 (安政 4) 年に津山藩医・箕作秋坪の三男として江戸津山藩邸で出生。1870 (明治 3) 年に慶應義塾、2 年後に大学南校でアメリカ人ハウスに学んだ後、1873 年 (明治 6) 年にハウスに従い 15 歳でアメリカ留学し、ハートフォード高校入学する。その後、トロイ工科大学で土木工学を専攻したものの、1877 (明治 10) 年エール大学に転学して動物学を学ぶこととなる。21 歳の時、ジョンズ・ホプキンス大学でさらに動物学を深め、1881 (明治 14) 年にイギリスはじめヨーロッパ各国を訪問し動物学の現状を学んでいる。とくにイタリアではナポリ臨海実験所を訪れ、ドールン所長の知遇を得たことで、後に日本での臨海実験所建設の助言を仰ぐことになる。

帰国後、1882 (明治 15) 年、24 歳で東京大学教授となり、4 年後の帝国大学令公布により東京帝国大学理科大学動物学教授となった。1886 (明治 19) 年にアジアで最初の海洋施設である帝国大学臨海実験所を三浦半島三崎に設立させた。箕作が初めて訪れたときにおこなった鮑の発生実験が三崎での発生学研究の始まりであったという。この三崎臨海実験所にはスタンフォード大学のジョーダンやコロンビア大学のバシュフォード・ディーン、ジェームズ・アボットが来訪している。

なお、ジョーダンは東京大学植物学教授の矢田部良吉とコーネル大学での同窓であった。箕作はエール大学で臨海実習会に参加したことがきっかけで、主催した動物学のブルックス教授に師事することになったという。ブルックスはルイ・アガシーが主催したペニキーズ島の自然史学校の実習会に参加し感銘を受けたことが契機となって、エール大学でも臨海実習会をおこなうことになったという。ルイ・アガシーの自然史学校で学んだジョーダンなどの研究者や学生たちが、全米各地に動物学や魚類学、発生学をさらに広げ深めていった。とくにその中心になったのはスタンフォード大学初代学長のジョーダンであり、世界的にも魚類の調査研究ではその先頭にたっていたのである。

1889 (明治 22) 年、岸上鎌吉が東京帝国大学動物学科を卒業しているが、箕作教授は岸上を水産伝習所教員になることを薦めたのかもしれない。箕作は教育者・研究者としての調査研究活動だけでなく、水産に関わる国家的な施策を実施する際、たとえば水産博覧会や国内勸業博覧会の審査官や委員、あるいは水産調査委員会委員や水産調査会委員など、水産分野の委員に委嘱され、岸上

がいた農商務省と極めて深い関係になっていった。岸上は農商務省の水産官吏であったが、研究者としても精力的に活動し、動物学や魚類学について多数の論文を発表している。後に東京帝国大学動物学科の教授になっている。

1897 (明治 30) 年、アメリカのワシントンでオットセイ保護問題評議会の日本委員としてアメリカへ派遣されたが、サンフランシスコでは親しかったスタンフォード大学の D・S・ジョーダン総長を訪ねた後に、一緒にオットセイ保護会議に参加している。その後 1 年にわたって、欧米の動物学の状況を視察して、ケンブリッジでの万国動物会議の日本委員として、岸上鎌吉らと参加している。

1900 (明治 34) 年に 43 歳で東京帝国大学理科大学長になったものの、1909 (明治 42) 年に 51 歳の若さで死去している。なお、箕作佳吉は日本の動物学草創期の第一人者であり、学名や和名に献名されている。学名では、*Coeloplana mitsukurii* Abbott (クラゲムシの一種)、*Mitsukurina owstoni* (ミツクリザメ属)、*Scirpus mitsukurianus* (マツカサススキ) など、和名ではミツクリエビ、ミツクリザメ、ミツクリエナガチョウチンアンコウなどが知られている。

スタンフォード大学の学長や総長であった魚類学者ジョーダンは、米国と日本政府や水産界を繋ぐ重要人物であり、とりわけ日米の魚類の調査研究では極めて深い関係があった。それを裏付けるジョーダンの論文を発見した。

タイトルは『大瀧圭之介が日本で採集した魚類リストと 14 種類の新種を含む米国海洋調査船で採集した魚類リスト』(スタンフォード大学 ディヴィット・スター・ジョーダンとジョン・オースティン・スナイダー) と日本人の名前が入っている重要論文で、人的交流に関係した部分があるので英文も紹介したい。

『A LIST OF FISHES COLLECTED IN JAPAN BY KEINOSUKE OTAKI, AND BY THE UNITED STATES STEAMER ALBATROSS, WITH DESCRIPTIONS OF FOURTEEN NEW SPECIES.』(By David Starr Jordan and John Otterbein Snyder, Of the Leland Stanford Junior University.)

「...The present paper contains a list of the fishes from Japan contained in the Museum of Leland Stanford Junior University. or sent by that institution to the U. S. National Museum in Washington, with descriptions and figures of species which seem to be new to science.

The chief material on which this list is based is a collection made in 1895 and 1896 in the Bay of Tokyo about Misaki, and in Lake Biwa, by Keinosuke Otaki, a graduate of Stanford University and now professor in the Imperial Military Academy in Tokyo, but at that time an assistant to the Imperial Fisheries Bureau of Japan. Professor Otaki's collections were obtained under the auspices of the Hopkins Seaside Laboratory on Monterey Bay, under the patronage of Mr. Timothy Hopkins.

Supplementing these collections of Professor Otaki is a small collection of fishes from Lake Biwa, sent by Prof. C. Ishikawa, of the agricultural department in the Imperial University in Tokyo, and a collection of gobies and other small fishes from Prof. K. Kishinouye of the Imperial Fisheries Bureau. A few specimens have also been sent by Prof. Kakichi Mitsukuri of the Imperial University of Tokyo.

Collections of importance were made by the Albatross under the direction of Lieut. - Commander Jefferson F. Moser, LT. S. N., in the summer of 1906, while engaged in

investigations under the direction of the United States Fur Seal Commission.

These collections were mainly from Shana Bay, Iturup Island, from Ushishir Island, from Hakodate, and from about Yokohama. The specimens from the Kuriles have been already described in Jordan and Gilbert's "Fishes of Bering Sea," those from Hakodate and Yokohama (Bay of Tokyo) are here noted for the first time.

The types of the new species are all deposited in the U. S. National Museum, together with specimens of many of the others....」

翻訳すると「…この論文は、Leland Stanford Junior University (スタンフォード大学) の博物館に収蔵されている、あるいは同大学からワシントン DC の米国国立博物館に送られた日本産魚類のリストであり、新種と思われる魚類の説明と図が含まれている。

このリストは、スタンフォード大学を卒業し、現在は東京の陸軍士官学校の教授であり、当時は国の水産調査所の助手を務めていた大瀧圭之介が、1895年と1896年に東京の三崎付近と琵琶湖で行った採集が主な根拠となっている。大瀧教授のコレクションは、ティモシー・ホプキンス氏の後援のもと、モンレー湾のホプキンス臨海実験所の協力で入手された。

大瀧教授のコレクションに加え、東京帝国大学農学部の石川千代松教授から送られた琵琶湖の魚類コレクションと、国の水産調査所・岸上鎌吉博士から送られたハゼとその他の小魚のコレクションがある。また、東京帝国大学・箕作佳吉教授からも数点の標本が送られてきた。

アルバトロス号は、ジェフラーソン・F・モーサー中佐の指揮のもと、重要な採集を行った。1896年、米国オットセイ委員会の指示で調査に従事していたS. N. 中佐の指揮のもと、アルバトロス号によって重要な採集が行われた。

これらの採集物は主に択捉島、紗那湾、占守島、函館、横浜付近で採集されたものである。千島列島の標本はジョーダンとギルバートの論文『ベーリング海の魚類』にすでに記載されているが、函館と横浜（東京湾）の標本はここに初めて記載されることになった。新種の型はすべてアメリカ国立博物館に寄託されており、他の多くの種も標本に含まれている。…」

この論文の中に名前がある「大瀧圭之介」とはいったいどんな人物なのか。農商務省水産調査所が設立され、岸上鎌吉が中心的に動いているなかで、1894（明治27）年にスタンフォード大学卒業した大瀧圭之介は、水産調査所職員録（明治28年）に技手として岸上技師の部下であったとわかった。大瀧はジョーダンから動物学を学んで、後に日本の魚類調査では共同研究をし、モンレーのホプキンス臨海実験所とも関係があったと思われる。帰国後、農商務省水産調査所の技手として、各地の漁業調査だけでなく、とくに英語通訳や米国調査報告書の翻訳を担っていたという公文書があった。

その後、ジョーダンの論文にあるように陸軍士官学校教授になったと書かれているので、陸軍省人事名簿に教授大瀧圭之介をさがすと、1900（明治33年）の名簿に名前が掲載されていたが、それ以外は大瀧の経歴は不明である。ただ、いくつか手掛かりはあった。まず、明治13年の東京大学予備門資料に、前年12月「第一期試業改定名簿」というものがあり、「第三級五」のクラスに「大瀧圭之介」の名があった。東京大学が誕生していく経緯では、東京開成学校と東京英語学校が合併し東京大学予備門がつくられる。大瀧は東京英語学校の学生であった可能性があり、明治12年段階での学籍名簿とわかった。東京大学の卒業生名簿にはなかったもので、その後、他の大学に学んだ後、渡米したのではないか。1890（明治23）年頃にスタンフォード大学に入学し、ジョーダンから動物学を学び、1894（明治27）年に卒業したのであろう。

帰国後は、英語に堪能であっただけではなく、米国魚類学の第一人者でもあるジョーダンから学んだことが、結果的に箕作教授や岸上技師のいる農商務省水産調査所の採用になったとも考えられる。1896（明治29）年に米国蒸気調査船アルバトロス号（ジェフラーソン・F・モーサー中佐指揮）が日本近海に調査活動に来たが、外務省史料に1897（明治30）年「膾炙ノ棲息研究ノ米國理學者汽船アルバトロス号ニテ千島群島へ越キ度旨同國公使ヨリ申出一件」（国立公文書館・アジア歴史資料センター）があり、そのなかに米国公使より調査でお世話になったと人物として、「農商務省水産調査所 所長藤田四郎 岸上鎌吉 大瀧圭之介」の記載がある。そして、前述の論文に「…大滝教授のコレクションは、ティモシー・ホプキンス氏の後援のもと、モントレイ湾のホプキンス臨海実験所の協力で入手…」との一文があり、モントレイ地域との交流を示唆するものとして注目される出来事である。

6. 野田音三郎や井出百太郎、森俊肇らの鮑漁業

サンディー・ライドン著『モントレイ湾地域の日本人』(『The Japanese In The Monterey Bay Region』・キャピトラブックカンパニー刊 1997 年)には、小谷省三の証言をベースに、1898 (明治 31) 年ポイントロボスにおいて器械式潜水による採鮑が始まった経緯が記述されている。

「…小谷源之助の息子である小谷省三 (故人) によれば、仲治郎とともにポイントロボスに来た 3 人の海士がまず気付いたのは鮑漁には海水が冷た過ぎることだった。頭から身体全体を木綿の布で何重に覆っても、冷た過ぎて潜れないこともあった。小谷兄弟がこれを千葉に伝え、1898 年後半に、海士たちが潜水器のヘルメットを持参するようになったが、これは経済的成功には至らなかった。1900 年前後に、ポイントロボスの地主であった A. M. アーレンと小谷源之助が協力することになり、少しずつ進展がみられるようになった。当初、ポイントロボスで採られた鮑は、乾燥させて日本や中国に輸出するか、カリフォルニアで米国市場向けに販売された。しかし、アカネアワビはかなり大きく、適度に乾燥しているかどうかを判断するのは容易ではなかった (水分が多いと腐ってしまい、乾燥しすぎると硬くて切れなくなってしまう)。そのため乾鮑に携わった関係者は缶詰にして保存する方法を探し求めていた。1900 年前後に鮑を缶詰にしようといくつかの試みがなされ、最終的には小谷とアーレンがポイントロボス缶詰会社を設立…」という内容である。

1981 年の省三のインタビュー証言では、野田が 1895 (明治 27) 年日本政府に「鮑潜水漁のやり方」などについて手紙を出したとこれまで聞いたことがない話があった。「…最初パシフィックグロブへ行き、そこに 1 年住み…ポイントロボスへと出て来て鮑漁を始め…当初、2、3 人の潜水夫を連れて…素潜りを行い…しかし水は大変冷たく…彼は父親に、つまり私の祖父に手紙を書き…祖父は海産物を商い、ヘルメット潜水、深海潜水用具類を所有していたので、彼はそれらをこちらに、その装置を全て、深海潜水、空気ポンプ、古いポンプではあったが、それにホースをこちらへ送り…鮑漁を始めた…」という話も極めて重要である。

サンディー・ライドンは著書で「…小谷兄弟がこれを千葉に伝え、1898 年後半に、海士たちが潜水器のヘルメットを持参するようになった…」という点では、具体的にどういう経緯で持参してきたかが書かれていない。省三にインタビュー証言では、源之助が父親に手紙を出し器械式潜水器一式を送ってもらったと、より具体的な内容になっており、これまでにない重要証言となる。

野田や井出が資金を出し磯部が購入した潜水器とされてきた。もし違うならば採鮑業の主体が誰であったかとなる。省三の証言通りならば、野田や井出が事業を立ち上げたとしても、器械式潜水用具の準備は小谷兄弟がおこなったとなれば、ポイントロボスでの鮑漁業開始の説明が違ってくる。省三の証言を含めて野田が鮑漁業を始める際に、どのような対応であったかを文献や聞き取りなどを再検討していきたい。

源之助や仲治郎らが渡米した前後のことは、アメリカ側からの資料や聞き取り証言、あるいは日本人が書いた移民に関わる米国見聞録などで調査研究がおこなわれてきた。なかでも源之助や仲治郎らが渡米した経緯を取り上げた大場俊雄著『房総の潜水器漁業史』(崙書房ふるさと文庫 1993 年)の「VI. カルフォルニア州へ伝播した潜水器漁業技術」の項は基本的な文献である。

渡米に関わり取り上げられている人物が「野田音三郎」である。野田という人物は、1864 (元治元) 年に佐賀県牟田辺村の石井家に生まれ野田林右衛門の養子となっている。1889 (明治 22) 年渡米しサンフランシスコを拠点に、各種農園作業や山林開墾事業に従事していたが、劣悪な労働環境を改善するため労働団体を結成するなど、日本人労働者の地位向上と職場開拓に務めたといわれる。

その後、開墾事業を続けながら 1898 (明治 31) 年モントレイ湾で日本人による本格的な漁業を

開始し、乾鮑や鮑缶詰など加工品の製造に取り組んだ。日本が日露戦争に勝利した 1905 (明治 38) 年頃から排日の動きが高まると、各地方にあった在米日本人協議会を連携させ、在米日本人協議会を結成するとともに、代表としてワシントン駐在大使青本周蔵に面談し、排日問題の解決を働きかけるなどに尽力していた。1913 (大正 2) 年、カリフォルニア州日本人中央農会が設立されると会長に就任し、稲作にも取組んでカリフォルニア米生産への道を聞いた。1915 (大正 4) 年、サクラメントにおいて 52 歳で死去した。(参考・佐賀県人名辞典・佐賀県電子書籍ポータルサイト)

加藤十四郎によって「野田音三郎君傳」(『在米同胞発展史-附・名士列伝』博文館・1908 (明治 41) 年) が書かれたのは、鮑漁は許可制となって規制が強化された時期であり、43、4 歳頃の野田がマルパスという人物と鮭や鮑などの缶詰会社を共同経営していた。なお、モントレイは野田たちが来る前、中国人漁師たちが鮑漁をしていた地域とされるが、野田の住んでいたパシフィックグローブ (ポイントアローズ) は、中国人のコミュニティがあったところで、中国人や日本人、その他ヨーロッパ系移民の漁師たちが混在していた場所でもある。

『在米同胞発展史』には、野田が「…モントレイの労働者中…漁師数名あり、日曜毎に鮮魚五六十斤を獲るや、君は彼等の説を徴し且種々調査…支那人、以太利人等斯業に従事して相當の利潤…初めて漁業開始の意を決せり、當時該地方水族…鮭、鰯、鯖、比目魚、黒鯛、珍鯛、鰻、烏賊、鰯なり…君は干鰻製造法に就き種々工夫…三十三年よりは罐詰製造業を創めたり…」とあり、いろいろな調査をして「…干鮑製造…」の事業としたのは、中国人漁師が干鮑を本国に輸出しているのなら、日本にも輸出できると思ったのかもしれない。当時、すでに海岸沿いの浅海の岩場にある鮑は枯渇すると喧伝されていた時期である。野田がマルパスと共同して鮭と鮑の缶詰製造のため、モントレイ水産缶詰会社を設立したのは 1902 (明治 35) 年のことで、モントレイでは初期に設立された缶詰会社といわれている。

野田のモントレイでの動きは、前述した大場俊雄の著書のなかでは『在米日本人史』(在米日本人会・1940 (昭和 16) 年) を取り上げて紹介している。第 3 章で取り上げた省三のインタビュー証言を参考にしながら検討してみたい。

まず『在米日本人史』には「…1898 (明治 31) 年モントレイ地方の農業開発者野田音三郎は…漁業に従事する事…採鮑業方面に於ても野田音三郎は其元祖であつて、1899 年頃より採鮑を試み干鮑として支那輸出を図つた。折柄加州は干鮑を法律を以て禁止したため罐詰に代へたるも販路少なく失敗であつた。其後採鮑業は井出、森等を経て小谷兄弟の白人と提携して調査と研究とを重ね、漸く収支相償ふに至り採鮑区域を拡大するに至つた…」とあり、別の項で「…1895 年 (明治 28 年) モントレイ市に近いカーメルのポイントロバスでは邦人の手による採鮑業が営まれていた。恰もこの事業は当時加州在留同胞指導者の一人であつた佐賀県人野田音三郎が画策創始した…」と記載されている。

つまり、採鮑業は最初に野田より始まり「1899 年頃より採鮑を試み干鮑として支那輸出」と記し、別のところで「…1895 年 (明治 28 年) モントレイ市に近いカーメルのポイントロバスでは邦人の手による採鮑業が営まれていた。恰もこの事業は当時加州在留同胞指導者の一人であつた佐賀県人野田音三郎が画策創始…」と採鮑業の開始年代が違っている。これはモントレイ (パシフィックグローブ) とポイントロバスの場所の違いがあつたかもしれないが、1895 年 (明治 28 年) の時期には「…ポイントロバスでは邦人の手による採鮑業…」はおこなわれていなかったと思われる。文脈からみて事実関係を確認しないでの編集があつたのではないか。

省三の証言では採鮑業をおこなっていたパシフィックグローブのモントレイと、カーメルのポイ

ントロボスという鮑生産地をそれぞれ区別しているが、他の文献の多くはモントレーとひとつの地名で括っているので、それぞれの著書では聞き取り証言を整理しなかったと思われる。

また、野田が「…日本政府に鮑潜水漁のやり方などについて手紙を書いた…」と省三が証言で述べている。しかし、『在米日本人史』では「…井出と諮つて日本より専門家を呼び寄せることとし日本で諸準備と機械の買付け等を磯部小哉に依頼した。磯部は農商務省へこのことを相談に及んだので、農商務省では当時千葉県にみた小谷源之助にこれを通じて渡米を促し…」となっている。野田自身が政府（農商務省）に相談したとは書かれていない。

井出は農商務省への相談した人物が「磯部小哉」とされるが、この人名は大場俊雄の調査で、正しくは「磯部水哉」とされている。「…磯部は農商務省へこのことを相談…」だけでなく、井出は磯部に「機械の買付け」を依頼している。商人であったとはいえ磯部が、本当に高価な器械式潜水用具一式の購入を引受けたであろうか。そして、農商務省へ行って専門家の派遣を相談したとあるが、その後、小谷兄弟になった経緯が記されていないうえに、「小谷は当時千葉県で潜水機を以て採鮑業を営んでみた」程度であるのが不思議である。

磯部水哉という人物は、井出と同じく静岡県人であり、井出より12歳年上であった。東京市芝区や日本橋区に住み、1879（明治12）年22歳のときに上海に、1881（明治14）年24歳のときに再び上海に商用で渡航していたという。この時期に対清国貿易では、輸出品の乾鮑の不良品が増え、先方から苦情が出ていたので政府は貿易推進のために農商務省を中心に品質向上に取り組んでいた。磯部がこのような問題に関わっていた人物であったとすると、農商務省との人脈はある程度あった可能性は考えられる。この点で農商務省との関係資料をさがしながら、引き続き調査研究を図っていく必要があると思っている。

1898（明治31）年、磯部は旅行目的を商業とする合衆国行き旅券交付を受け、井出と一緒にモントレーに出向き、井出水産部で採鮑漁や乾鮑製造を進めることになったと思われるが、その詳細はわからない。

1918（大正7）年頃、安房郡七浦村千田で書かれた『紀念記録書』（誤記や訂正部分があるので下書きと思われる）という小冊子には、井出百太郎のことが記載され、「…明治二十九年極月中亞米利加合衆國キヤリフォルニア州モントレー郡ロバートサイドに鮑採取業經營スベキ希望者静岡県井出村井出百太郎ナル者小谷兄弟諸水産物奇製ノ妙實ナルヲ傳知セラレ依テ經營試驗的小谷氏兄弟ヲ技手者トシ井出氏ヨリノ層托ヲ受ケラレ鮑採取労働者トシテ安田市之助、山本林治、安田大助右三名被雇サレ安房郡内ニテ渡米者ノ端緒デアツタ…」と書かれている。

この冊子には井出と小谷兄弟の関わりについて、1896（明治29）年12月カリフォルニア州モントレー郡ロバートサイドで鮑漁業經營を希望していた井出は、小谷兄弟が諸水産物加工技術に優れ確かなことを聞いたので、試みに小谷兄弟に技術者になることを依頼したとある。そして、鮑採り労働者として安田市之助ら3名を雇ったことから鮑漁師の渡米が始まったとの内容である。

ここには野田音三郎や磯部水哉、また農商務省の関わりは書かれていないが、もし事実であるとしたら、「明治29年12月…ロバートサイドで鮑漁業經營を希望していた井出…」が、「…試験的に小谷兄弟に技術者、援助者になるよう依頼…」したもの、実際には日本から小谷兄弟ら5名が渡米したのは1897（明治30）年なので、「試験的に」源之助が渡米して状況を手紙で清三郎に伝えて、仲治郎ら3名が器械式潜水用具一式を準備し、器械と一緒に渡米したということになるのであろうか。今のところ「モントレー郡ロバートサイド」という場所が特定できてはいない。

この冊子は、井出百太郎については多少の情報が書かれているので、渡米した潜水夫が井出商会

の時に伝聞したことを綴ったと思われる。ただ、千田区漁業組合小谷仲治郎組合長が潜水器械1台450円で購入した際の記録である。断片的ではあるが、内容は渡米していた仲治郎が千田に帰ってきて、千田区のために潜水器1台を根本区から買入れたという。かつて根本区も器械式潜水のために人材養成をして熟練させたことで村が栄えていったので、千田からも渡米する潜水夫を養成して村を栄えさせたいと、村の人びとの思いを代弁したのかもしれない。

『在米日本人史』には「…然るに其後に至り野田と井出との協力作業は分裂し井出はポイントロバ스에採鮑業を起し、日本より潜水機並に漁師を呼び寄せ、野田も亦日本より漁師を雇って事業を拡張し、茲に於て兩人は対立するに至つたが、井出は資金つづかず、1898年頃より桑港の森肇の融資によつて事業継続を図つたが遂に及ばず、ポイントロバ스에於ける井出の採鮑業は、森及び野田の協力者小谷の手によつて経営されることとなつた…」とある。

井出百太郎のことは、大場俊雄が「米国アワビ漁業の経営者、井出百太郎」（『地域文化研究』八戸工業高専 地域文化研究センター・2010年）で整理している。それを参考にすると、1867（明治元）年静岡県の大淵村で後藤善藏の二男として生まれ、1878（明治9）年に井出角十の養嗣子となった。外国語に熱心な教育を進めていた静岡県尋常中学校に入学すると、アメリカ人教師との交流を深め卒業している。そして、1890（明治23）年に初めて渡米して以来、明治25年、27年、29年、31年、34年と計6回旅券が付与され、当時としては頻繁な往来をしている人物である。

井出は1892（明治25）年にサンフランシスコ市第6街201番に井出商店を開店するなど、輸出入品を扱う貿易商であった。『日本現今人名辞典』（1900（明治33）年）の「井出百太郎」には、「…貿易業に従事す君は学生を養成するを好み学資を投じて多くの書生を欧米に留学せしむ又好んで旅行しなし年度上半期は欧米間の商業に従事し下半期は東洋間貿易業を視察するを以て任務…」とあり、貿易を学ぶ学生のために奨学金を出して欧米に留学させるような企業人であったと紹介している。磯部水哉が若い時から度々上海に渡航し清国貿易に精通していたことから、井出はモントレーの乾鮑を清国に輸出するために磯部の支援や助言を求めたのではないだろうか。日清戦争前後で清国貿易を実施するため、「…東洋間貿易業を視察…」するとともに「…本業の外米国モントレー郡のニヶ所に井出水産部を設け捕鯨、干鮑、肥料、魚油其他の海産業に従事…」したと書かれている。井出水産部にはモントレー郡に施設「ニヶ所」といつているが、モントレーとポイントロバスであるかは不明である。

そして、『在米日本人年鑑』（明治39年）には「二十五年今の井出商會ハーワード街と第六街の角に設立された」と記載され、『現代人名辞典』、『東京社会辞彙』、『大正人名辞典』にも明治25年サンフランシスコに雑貨店を開業と書かれている。その後、市内の第6街からバッテリー街に店舗をかえて営業し、日本には東京日本橋区小舟町1丁目6番地や神戸栄町6丁目48番館に出張所を置き、様々な輸出入品目を扱っていたのである。井出百太郎は英語に堪能であり貿易業や旅行に精通した明治の国際人であった。

井出と野田はモントレーでの豊富な鮑をみて、缶詰や乾鮑の輸出構想をもった。小谷兄弟や海士が現地到着後、モントレーでの野田音三郎による採鮑に始まり、その後井出商会水産部がモントレーか、ポイントロバスで素もぐりによる採鮑業と乾鮑加工をおこなっていく。書簡類の日付からみて、1898（明治31）年9月頃、井出商会水産部が器械潜水による採鮑漁を導入していったと思われる。

だが実際には、器械式潜水による採鮑漁や乾鮑製造についての知識・技能がなかったので、長続きせず経営が不振となって共同経営を解消したとある。それぞれが資金のことや鮑資源保護ためと

された採鮑漁禁止運動に対抗できず、結局撤退して、小谷兄弟がポイントロボスで受け継いでいったのである。

第2章の源之助が書いた「陳情書」にあったように、源之助自らがモントレイでの採鮑業の始まりを「…此事業は私明治三十年、始めて当加州に於て潜水器を以て採鮑開始…」と書いている。省三の証言にあるように源之助がモントレイに着いてから「…最初パシフィックグローブへ行き、そこに1年住み…ポインロボスへと出て来て鮑漁を始め…当初、2、3人の潜水夫を連れて…素潜り…」をおこなっていた。そのパシフィックグローブの野田音三郎宅から父清三郎に手紙を出している。渡米した5名は野田のところで素潜りの鮑漁をし、ときには場所を変えてポイントロボスでも素潜りの鮑漁をしながら、海底の地形や海藻の分布など鮑の生態的な調査をしていた。その後、「…祖父は…ヘルメット潜水、深海潜水用具類を所有していたので、彼はそれらをこちらに、その装置を全て、深海潜水、空気ポンプ、古いポンプではあったが、それにホース…」など金澤屋から器械式潜水用具が到着し、野田の缶詰会社への鮑生産は、素潜りから器械式潜水による採鮑となったのではないかと推測される。結局は、1年ほど野田と関わっていたのだろう。

ポイントロボスの海が気に入ったとはいってもA. M. アーレンとの出会いがなければ、ポイントロボスでの鮑漁は不可能であり、土地所有者であるアーレンの許可がなければ、定住することも施設を建てることもできなかつたはずである。A. M. アーレンの理解を得て器械式潜水による鮑漁を始めただけでなく、アーレンが資金を出して小谷兄弟との共同経営でポイントロボス缶詰会社の設立ということになった。

省三がいうように、「…父が缶詰製造を始められた理由はアーレン氏でした。アレキサンダー・マクミラン・アーレンはこの土地を、つまりポイントロボス公園全体、このあたりの全ての土地を所有…父はアワビ缶詰製造業への参入を望んで…アーレン氏に話しをし、彼はここで缶詰製造業を始めようと言ひ…父はここに入って来てアーレン氏と共にビジネスを始め…（当時日本人が白人をもつことは稀であり）…パートナーシップでは父が全てを運営し、事業を引き受けました。アーレン氏が土地の所有者であることから、私たちは彼の許可を得て缶詰工場などを立ち上げ…」という。

『在米日本人史』をみると「…採鮑業には日支人多数の漁夫が従事し、鮑は乾燥して日本にも送り…」という一文があり、前述の『在米同胞発展史』『野田音三郎君傳』にも「…支那人、以太利人等斯業に従事して相當の利潤…初めて漁業開始の意を決せり、當時該地方水族…鮭、鱒、鯖、比目魚、黒鯛、珍鯛、鰻、烏賊、鰯なり…君は干鰻製造法に就き種々工夫…三十三年よりは罐詰製造業を創めたり…」とある。野田は採鮑業より乾鮑製造に関心をもっていたような記述を感じる。そして、『北米踏査大観（上）』でも野田の採鮑業が「…始めて日本人の漁業に従事したるは、明治三十年野田昔三郎鮑の採收を始め、其後野田の去るや…」と、詳しい記述をしないままに途切れている。

第2章の「陳情書」のなかで、源之助自身が「…此事業は私明治三十年、始めて当加州に於て潜水器を以て採鮑開始…」と述べているので、そのまま「明治三十年…」という言葉を受け取れば、9月下旬にモントレイの野田宅に着いてから、直ぐにモントレイ半島周辺の海洋や鮑の調査をし、父清三郎に手紙を書き、仲治郎には金澤屋の器械式潜水用具一式を一緒に輸送したという可能性も考えられる。その輸送の際に米国への医薬品などの輸出に手慣れている川名又之輔などがアドバイスや支援をしたかもしれない。

ただ、器械式潜水用具一式を米国に持ち込むことに問題はなかったのか。また、その年の12月に仲治郎と海士らが器械式潜水用具を使用して、ポイントロボス周辺の鮑や海底の調査を無断で出

来るだろうか。もし、ポイントロボスでアーレンとの出会いがあれば、器械式潜水用具の持ち込みなどは可能であったであろう。あるいは農商務省水産調査所とスタンフォード大学ホプキンス臨海実験所が、共同してモンレー海域の調査研究に器械式潜水用具を使うとの名目的な理由があれば可能であったかもしれない。いずれにせよ、裏付けの資料がなく、それぞれを仮説としておきたい。

これまで『在米日本人史』のなかの「…井出はポイントロボスに採鮑業を起し、日本より潜水機並に漁師を呼び寄せ…」とか、資金が続かず「…ポイントロボスに於ける井出の採鮑業は…小谷の手によつて経営…」が取り上げられてきた。このことでは柏村桂谷著『北米踏査大観（上）』では、「…其後野田の去るや、千葉縣人小谷源助、カーメルの地に入りて、鮑の採收を爲し、之を罐詰及び干鮑として輸出し事業漸く盛ならむとするや、加州の法律は干鮑の製造を禁止したるを以て、現時は主として罐詰として、之れを支那及び日本に輸出…」と記されており、カーメルの地とはポイントロボスのことであるとわかる。

野田と井出の働きかけで小谷兄弟が渡米した「…明治三十年…鮑の採收を始めた…」場所が、野田の住むモンレーのパシフィックグローブとすると、第2章の「陳情書」のなかで源之助が「…此事業は私明治三十年、始めて当加州に於て潜水器を以て採鮑開始…」といているので、最初に器械式潜水の採鮑漁を始めた場所であろう。

その後、野田と井出はモンレーで経営的に分裂し野田が離脱したので、井出は水産部をポイントロボスに設立して、小谷兄弟らと採鮑漁を始めたのだろう。この時期、モンレー郡の人びとから鮑の獲り過ぎによる絶滅を憂える声があがる。そのことは新聞報道にも取り上げられ、『日本現今人名辞典』（の明治33年）には、明治「三十二年四月米國加州の縣會に於ひて井出水産部漁業禁止案の下院を通過しざるも氏の反對運動の結果なりと云ふ此年七月又モンレー郡會に於て加州縣會に提出せしも此れ又氏の反對運動によりて法律とならず一ヶ年米金六十弗（日本金百二十圓）の税金を郡に仕拂ふ事に修正せられたし」と書かれている。

『在米日本人史』には、採鮑漁を始めて間もなく資源保護ということで鮑漁業禁止や鮑の郡外搬出禁止を主張する動きが高まり、また1900（明治33）年頃には井出の資金が続かず、ポイントロボスでの経営を閉じたと記されている。井出の経営を受け継いで器械式潜水による採鮑漁や乾鮑加工業を開始したのは、サンフランシスコの森俊肇と小谷兄弟という。そして、注目されるのは「…採鮑業は…小谷兄弟の白人と提携して調査と研究とを重ね、漸く収支相償ふに至り採鮑区域を拡大…」という部分である。「…白人との連携…」とはアーレンはじめ学者研究者たちのことを指しているのだろうか。

大場俊雄は論文「米国でアワビ潜水漁業、干鮑加工業を営んだ護俊肇」（『地域文化研究』八戸工業高専 地域文化研究センター・2013年）で、サンフランシスコで森薬舗を営んでいた「森俊肇」を紹介している。護俊肇は1900（明治33）年頃、モンレーで野田や井出から鮑事業を引き継ぎ、小谷兄弟の器械式潜水による採鮑業を支援した人物であった。「護」の宛名で「小谷」宛への25日付書簡【174】がある。「…御養生專一に遊さるべく候…米国より書面には、三月末か四月上旬には、帰朝する様申参り候ニ付、一寸御通知申上候…」との内容だけで護俊肇を差出人とできるか。書簡の「御養生專一」との御見舞い言葉は誰にむけたかを推察すると、やはり1907（明治40）年3月「脳症」で村議を辞職した清三郎に向けたと思われ、護俊肇が御見舞いと帰朝の挨拶をしたものであろう。だが、源之助の弟小谷寿一の就職について、なぜか触れられていない。

寿一の清三郎宛ての書簡【21】の内容は、石田トミと結婚した寿一が夫婦で渡米して護俊肇経営の森薬店に勤めることになるが、渡米の手続きを報告している。「トミ入籍之義ニ付種々御心配…

謹啓 兼ねて御送附方相願へ置き候膳本、本日正ニ落手仕候間御通知…本日直々東京府ニ向へ提出…森氏之証明書には渡航費用一切を支給し呼寄候旨記入之あり…其筋より其等の件に付き取調…在京護夫人迄で届き…渡米之節ハ同人より受取る様…又川名方にて目下売薬商見習い中…」とある。寿一はトミと結婚し入籍したのが 1907（明治 40）年 1 月である。渡米にあたり書類や連絡などは在京していた護夫人が関わるとともに、渡米費用を一切負担してもらい、4 月 18 日に日本を離れた。そして、仲治郎の清三郎宛 6 月 29 日付書簡【222】では「…寿一事海上無事着米被致候趣き、安心仕り候、実ハ時節柄如何かと案じ居り候処、差支へなく上陸致し候義、誠ニ幸福ニ奉存候…宛名ハ森薬店方と致し置き候…」と、当時、排日風潮が強まり移民が難しくなっているなかで、寿一・とみ夫婦が無事、サンフランシスコに上陸し森薬店に着いたとの報告を受け安堵している。

柏村桂谷著『北米踏査大観』（1911（明治 44）年）によると、護俊肇の経歴は滋賀県長浜出身の 1860（万延元）年生まれであるが、1885（明治 18）年渡米し、ホテルや葡萄酒醸造場で真面目に働き、重要な任務に付いたことで特別の収入を得て、貯蓄した資金で材木輸出事業をおこなったとされる。しかし、失敗して再び古着類及び時計などを扱う仕事で資金を貯めると、海産物事業が儲かると聞き、小谷源之助とともにモントレイ付近で採鮑事業に取り組んだという。その後、海産物事業も不調になって撤退して、サンフランシスコの日本人社会に薬舗がなかったので開業したと記述されている。

だが、実際は旅券下付記録から渡米は 1897（明治 30）年 12 月 24 日であり、後の出版物が「森薬店」開業を翌 98（明治 31）年とし、住所はサンフランシスコ・デュポン街 527 番地となっている。数年後の日系新聞広告では「森薬舗」と改名し、引き続き「森」を商号としていた。薬舗経営をしながら護俊肇は、1900（明治 33）年にモントレイの採鮑業や鮑加工事業を井出商会から買取り、森合名会社水産部を設立したのである。ただ、日本への乾鮑輸送に失敗し、2 年も経たないうちに撤退したことで、小谷兄弟はポイントロボスの A. M. アーレンの支援を受けて、器械式潜水による採鮑業と乾鮑製造を受け継いでいったのである。

7. 排日問題とモントレイの鮑漁への規制

モントレイ地域での日本人漁師（ダイバー）たちによる鮑漁業について、前述した『モントレイ湾地域の日本人』（サンディー・ライドン著）を参考に、その経過や排日問題と鮑漁規制の流れをみてみたい。

まず、当時の排日運動の様子と重ねながら、モントレイでの鮑漁業についての新聞記事の変化を取り上げている。1897（明治30）年から1898年にかけては、日本人の器械式潜水による採鮑業を興味深く記事にしていた。だが、水揚げされていた鮑が乾鮑に加工され、モントレイから貨車に積まれサンフランシスコなどに向け、大量に輸送される姿が見られるようになると、翌99（明治32）年には鮑を絶滅に追いやっているという言葉が、紙面に警告として現れるようになったという。

排日運動の高まりと重なり、鮑漁業について住民たちからの議論が始まり、1899（明治32）年モントレイ郡監督委員会に鮑資源の保護を要請する請願書が提出された。モントレイにおいて器械式潜水による採鮑漁法を制限する条例の制定が議論されることになり、郡監督委員会では小谷兄弟らの採鮑業者に鮑資源に関する陳述を求めてきた。日本人鮑漁師側の弁明が地元住民に届いていくかは、排日運動の高まりのなかで大きな壁になっていたであろう。

ポイントロボスにおいて器械式潜水の採鮑が始まったのは、前年の1898（明治31）年である。『モントレイ湾地域の日本人』の一文を再度取り上げるが、「…仲治郎とともにポイントロボスに来た3人の海士がまず気付いたのは鮑漁には海水が冷た過ぎること…小谷兄弟がこれを千葉に伝え、1898年後半に、海士たちが潜水器のヘルメットを持参…北米太平洋岸の近代アワビ漁の始まり…鮑漁を産業として確立しようとする初の試みは、最初に取り組んだ野田にとっても、同じく移民で資産家でもあった井出百太郎や、小谷兄弟のような事業家にとっても、経済的成功には至らなかった。1900年前後に、ポイントロボスの地主であったアレキサンダー・M・アーレンと小谷源之助が協力することになり、少しずつ進展がみられるようになった…」と書かれている。

ここでの源之助とアーレンとが出会った1900年前後が、渡米鮑漁師たちの大きな転機となった。当時、カリフォルニア州などでの排日感情が高まったことに日本政府はすばやく対応している。『日本外交文書』（対米移民問題経過概要）外務省通産局・昭和8年）には、「…帝國政府ハ明治三十三年八月當分ノ内米國行移民ノ渡航ヲ一切差止ム可キ旨各府縣知事へ訓令セリ…」とあるので、1900年には米国本土に向けた日本人労働者への新規旅券発給を自主的に停止するという事態になっていく。

源之助は第2章の「陳情書」のなかで「…米国人之是れを食する者無之為め、支那行き輸出向けとして乾鮑製造罷在候処、日々多額之採鮑は、米国人と利益の関係無之為、屢々採鮑禁止を称える者有之候…」と述べ、「…多額之採鮑…」での輸出向けの乾鮑製造をしていた。1899（明治32）年、地元新聞はモントレイの鮑資源を絶滅に追いやっていると警告し、排日の動きに拍車をかけた。

モントレイ郡監督委員会での議論は新聞に掲載されたようで、サンディー・ライドンは著書のなかで「…日本人は、科学的にそして控えめに議論…日本の鮑漁の歴史とモントレイの沿岸で獲れる様々な種の鮑の生活史を紹介し…鮑漁師（ダイバー）の代表者は、彼らが獲っているのは成長した大きな鮑のみであり、取り残されれば寿命で死ぬ…鮑を管理して大型のものを獲ることは、実は鮑の生産を増加していると指摘した。そして、自然の資源に対する日本人の姿勢は『鮑』は自然から与えられたものであり、私たちはそれを活用しなければなりません。海の底に残したままにしていれば、神の意思に背いて（活動して）いることになります。』と、見事に述べて締め括った」と述べている。しかし、地元新聞では、日本人鮑漁師の主張を「ずる賢い」国民が持ち出した「おとぎ話」

としてまったく噛み合わない論調であったと記述している。

1899（明治32）年10月、モントレイ郡監督委員会は日本人鮑漁師（ダイバー）と協議して、米国で初の鮑漁の規制を成立させたのである。その内容はモントレイ郡のカーメル川北側では鮑漁を禁止し、採鮑する漁師（ダイバー）に年間60ドルの許可料支払いを求めた。日本人鮑漁師たちは、ポイントロボスの南側から岩礁が多く人も住んでいない沿岸での鮑漁が認められ、同時にモントレイ半島の住民たちも半島周辺での鮑捕獲はできた。

その後、モントレイ郡やカリフォルニア州当局は、鮑の採漁に関わり次々と規制の法律を課していく。まず、1901（明治34）年、カリフォルニア州は販売目的の鮑漁師が獲ることのできる鮑の大きさを円周15インチ（38cm）、直径8インチ（20cm）との制限を成立させ、1913（大正2）年にはカリフォルニア州は州外への鮑出荷は違法であるとした。1915（大正4）年、州当局は州内で鮑を乾燥することや鮑貝殻・肉の州外出荷を違法とした。1917（大正6）年には、鮑はさらに厳しく制限し直径7インチ（18cm）を最小サイズとし、カリフォルニア州は、1921（大正10）年に1月15日から3月15日まで鮑の採漁を禁止するとともに、商業ダイバーには1939（昭和14）年に州が発行する特別な年間許可証を携帯することを求めた。【参考「モントレイ湾におけるアワビ規制」年表抜粋（『モントレイ湾地域の日本人』より）

このように1900年から1924年にかけて排日運動の激しくなっていくなかで、カリフォルニアの漁業のなかでも最も厳しく制限された漁業が、小谷兄弟たちの鮑漁であった。ポイントロボスにおいて、様々な規制を受けながらも器械式潜水による採鮑を継続させていったのは、驚くべきことといえる。一体、どのように対応して生き残っていったのであろうか。

これまで紹介してきた文献や資料と重なっているが、関係箇所を取り上げてみたい。まず、1940年に出版された『在米日本人史』（在米日本人会）は、比較的詳しく扱っており、「在米邦人と漁業」の項目で「…1899年頃より採鮑を試み干鮑として支那輸出を図った。折柄加州は干鮑を法律を以て禁止したため罐詰を代へたるも販路少なく失敗であった。其後採鮑業は井出、森等と経て小谷兄弟の白人と提携して調査と研究とを重ね、漸く収支相償ふに至り採鮑区域を拡大するに至った…」と、「…小谷兄弟の白人と提携して調査と研究とを重ね…」の部分は重要な内容といえる。

別の項目「排日と小谷の苦闘」には源之助が鮑魚規制にどう対応したかの説明があり、第3章の省三証言の際も取り上げたが、もう一度紹介する。「…森肇と共同で井出よりポイントロボスの採鮑業を引受けた小谷源之助は、事業を益々拡張してその業績頗る賑盛なものがあつたが、1899年頃に至り排日の声漸く旺んとなり、小谷の採鮑業に対する圧迫も頓に加重され、加ふるにモントレイの弁護士のカキツツは邦人の採鮑禁止案を州議会に提出…法案は幸ひにして邦人側の弁護士ベスカに依って阻止された…引続いてサリナスの郡参事会でも同様邦人の採鮑禁止案を提出…再びベスカを弁護士としてこれに闘ふ…」と、次々と議会対策が施され、阻止したという。

それだけではなく「…小谷は同法案に反対の白人342名の署名をとつて郡参事会に訴へ或は郡参事員並びに英字新聞記者を招いて海上ピクニックを催し、その眼前に於て採鮑の実況を見せて、鮑採取の無害なるを説き…」と、啓蒙活動のために「海上ピクニック」というイベントを実施し、郡関係者や新聞記者へ議会対策をしている。源之助の「陳情書」のなかに「…採鮑禁止を称える者有之候も、其都度多額之運動費を支出…」とあり、「多額之運動費」とは対策経費であったのだろう。

この時期の動きをみると、「…三十二年四月…モントレイの弁護士のカキツツは邦人の採鮑禁止案を州議会に提出…」したときに、モントレイでは住民から郡監督委員会に対して、鮑資源保護を求める請願書が出された。州議会での採鮑禁止案は、「…三十二年四月米国加州の県会…井出水産

部漁業禁止案の下院を通過…」と、わざわざ「井出水産部漁業禁止案」と名付けられていたものが阻止され、井出「…氏の反対運動の結果なり…」と強調されている。その後、「…此年七月又モントレイ郡会に…提出せしも…氏の反対運動により法律とならず…」と、郡会でも阻止したとある。この郡会とは、前述した 1899（明治 32）年のモントレイ郡監督委員会の審議をいっているのであろうか。というのも前述したモントレイ郡監督委員会が日本人鮑漁師（ダイバー）と協議し成立した米国初の鮑漁規制の一つが、ここに書かれ「…一ヶ年米金六十弗（日本金百二十円）の税金を郡に仕払ふ事…」と同じ内容が示されているからである。

次に取り上げることは、すでに第 5 章の「魚類学者ジョーダンやディーンと日本」でも紹介したことであるが、『在米日本人史』のなかの「…昵懇の紐育コロンビア大学某教授に委嘱して州議会に出頭せしめ『鮑は一年四百万個の卵を生み、この割で繁殖せしめたならば太平洋も鮑を以て埋もれるであらう。斯る繁殖率の夥しい鮑は幾ら採取しても全滅の憂ひは些かもないのである』と説明せしめ、採鮑禁止の法案は斯くして遂に阻止されるに至つた。（註一前記某教授はその排日運動の当時鮫の卵研究の爲にポイントロバスに來たり、小谷の潜水夫によって卵を採取したことから小谷と昵懇になり、採鮑禁止案に対する苦衷を訴へて教授の後援を依頼…）」という極めて重要な記述である。この「…紐育コロンビア大学某教授…」は、スタンフォード大学のホプキンス臨海実験所の HP で紹介されているコロンビア大学のバッシュフォード・ディーンであると推察したと述べてきた。

当時、ディーンは鮫の卵を調査するため、ポイントロバスの小谷兄弟らの器械式潜水による方法で卵を採取してもらい親しくなつたと書かれている。源之助からの依頼もあり州議会での鮑魚禁止法案審議の際に参考人になって、研究者の立場から鮑の生態と採鮑の関係を報告したものと思われる。スタンフォード大学の魚類学者ジョーダン学長とも親しいディーンの陳述となれば、それなりの影響力があつたことであろう。源之助や仲治郎が渡米してから、器械式潜水による採鮑業には、排日問題と重なりながらさまざまな困難な状況があつた。しかし、ポイントロボスで継続することができた理由の一つには、スタンフォード大学やホプキンス臨海実験所などに関わる人びととの交流があり、海洋生物の調査研究という学問的な立場からの支援があつたことを上げておきたい。

そして、もう一つがアーレンとの交流である。『在米日本人史』では「…排日漁業法案はその後に至つても依然隔年毎に州会に提出される有様なので、小谷は排日の圧迫に打ち克つ爲に、1902 年（明治 35 年）彼の地主英人アーレンと共同事業として缶詰事業をも起こし…」と記されている。

省三の証言には「…父が缶詰製造を始められた理由はアーレン氏でした。アレキサンダー・マクミラン・アーレンはこの土地を、つまりポイントロボス公園全体、このあたりの全ての土地を所有…父はアワビ缶詰製造業への参入を望んで…アーレン氏に話しをし、彼はここで缶詰製造業を始めようと言ひ…父はここに入って来てアーレン氏と共にビジネスを始める…」と述べ、続けての「当時日本人が白人とのパートナーシップを持つことはまれでしたか」の質問に「そう思いますね。パートナーシップでは父が全てを運営し、事業を引き受けました。アーレン氏が土地の所有者であることから、私たちは彼の許可を得て缶詰工場などを立ち上げました」。さらに「そのようなパートナーシップは普通にあることでしたか」「いいえ、そうは思いません。これは所有権に関してはまれなケースで、缶詰製造業が設立されました」と述べている。

サンディー・ライドンは『モントレイ湾地域の日本人』のなかで、排日運動において源之助とアーレンとの関係は、「…ポイントロボスの所有者 A. M. アーレン…は 30 年以上、採鮑業において、小谷源之助の共同事業者であつた。アーレンは日本人の鮑漁師に…事業を発展させる安全な場所を

提供しただけでなく、生涯を通じて鮑漁師と鮑産業を守るよう訴え続けた。いたるところで日本人の技能を賞賛し、器械式潜水業を学びたい人を案内し、支援を惜しまず（鮑に関する初期の研究の多くは彼の支援によって実施）、考えられる限りの機会に鮑魚の陳情活動をおこなった。小谷とアーレンの協力関係の深さは、今日まで続く両家の深い友情…」と、重要な指摘をするとともに排日運動のなかでの二人の友情と交流を意義深く述べている。この二人の関係は次章の『安房の潮左為』を通じて取り上げていきたい。

A. M. アーレンについて十分な資料はないが、『モントレイ湾地域の日本人』や写真集『ポイントロボス (IMAGES of America POINT LOBOS)』（モニカ・ハドソン スザンヌ・ウォード共著・2004年）に「アーレン家族の写真コレクション」などとともに、モントレイにある歴史関係団体やウキペディアなどで紹介されているので参考にしていきたい。

アレキサンダー・マクミラン・アーレンという人物は、ペンシルベニア州スクラントン出身でペンシルベニア州の公立学校を卒業後、イリノイ大学土木コースで学び、1896年にカリフォルニア州に来て、サンフランシスコとオークランドとで土木や建築の請負業をやっていたが、翌年にカーメルランド&コール会社(カーメル石炭・土地会社)所有の採炭鉱山業を改善する技師として雇われたという。会社にとってポイントロボスの採炭が採算を取れない事業とわかると、アーレン自身が1898(明治31)年に会社から64エーカー(25.6ヘクタール)の土地を購入している。当時、源之助はすでにポイントロボスの海で鮑を収穫していたが、アランとの出会いが縁となって、二人はホエラーズ湾にポイントロボス缶詰会社を設立し、排日の嵐が続くなか共同経営者として1928年まで事業を継続させていった。

アーレンは、鮑缶詰会社とともに、砂と砂利の採掘会社も始め1899年には、近くのサンノゼビーチからコールシュートポイントまで狭軌の鉄道を建設し1954年まで砂の輸送事業もおこなっていたという。アーレンは収入源として牧場や酪農もおこなうことになり、家族と一緒にポイントロボスで過ごすことになった。アーレンは家族5人で、妻サイティ・モーガンと3人の娘マーガレット、ヘレン、ユニスであった。サイティは娘たちを育てながら、ポイントロボスでの缶詰製造事業に協力し、鮑缶詰のラベルにはサイティが考案したレシピが書かれるなどアメリカ人の食生活を変えようとする努力をしていた。仲治郎が帰国した1906(明治39)年にサイティは旅行中のサンフランシスコで大地震に遭遇し怪我を負って療養していたが、翌年3月に41歳で亡くなっている。アーレンの妻サイティの悲報を聞いた仲治郎は、千倉千田の長性寺において法要をおこなっている。

1994年、モントレイの新聞『ヘラルド』（8月25日付）にフリードマン記者が、「小谷の世界」とのタイトルで小谷源之助の特集を取り上げ、「…小谷は1897年9月29日にサンフランシスコに到着し、馬とボギーを借り1週間ののちにポイントロボスに到着した。彼は半島のまわりにたくさんのアワビの魚礁を見つけただけでなく、ホエラーズ湾のまわりにアワビを加工するのに最適な自然環境の整った場所をも見つけたのである。彼はカーメルランド&コール会社(カーメル石炭・土地会社)から土地を借りた。翌年、アレキサンダー・アーレンが64エーカーの土地を購入した。彼と小谷はパートナーとなったが、これは後に32年間も続く親密な友情と仕事上の関係となった。彼らのポイントロボス缶詰会社はアワビ漁会社としては大手のものとなり、カリフォルニアのアワビ市場において75%のシェアを占めたのである。小谷は2隻の潜水用ボートとそれらを引っ張るための1隻の母船を持っていた。それらの船は16人の日本人によって操業されており、小谷によって彼らは3~4年おきごとに交代していた。小谷が初めて海に出た船はアーレンが育ったペンシルベニアにある川の名前にちなんでラッカワナと名づけられた…」と書かれている。

この記事の後半部に「…ポイントロボスの歴史家、カート・ローシュ氏によると小谷はこの一帯にサイプレス(糸杉)を植林することで自然を保護したということである。1900年にカリフォルニア大学バークレー校海洋生物学者が訪ねて来たときには、彼らのケルプや海洋生物の研究の手伝いをした。そして、1906年にサンフランシスコで大地震があった際、有名な“オールド・ベテランズ・サイプレスツリー”が海に滑り落ちるのを縛って防いだ…」とある。

この新聞記事となった1994年時点では、ポイントロボスでの小谷源之助という人物のことは；知られていなかったといわれ、地道に源之助の事績を掘り起こしていたのがポイントロボスの「カート・ローシュ」という地域史研究者であった。なお、これまで紹介したスタンフォード大学のホプキンス臨海実験所の研究者だけではなく、「…1900年にカリフォルニア大学バークレー校海洋生物学者が訪ねて来たときには、彼らのケルプや海洋生物の研究の手伝い…」とあり、源之助やアーレンらは幅広い交流があったことがわかった。

そのことを示す写真集『ポイントロボス』の「アーレン家族の写真コレクション」にあり、写真のキャプションを要約すると、1903(明治36)年にA・M・アーレンはポイントロボスにカリフォルニア大学バークレー校土木クラスの学生たち(50数名)を招待し、夏期の土地監視キャンプの開催地としてアピールしたようだ。イリノイ大学で土木工学を学んだアーレンは、モントレイにおいて缶詰会社以外に、土木や建築に関わる事業や銀行業をおこなっていたというが、詳しいことはわからない。

『モントレイ湾地域の日本人』のなかでサンディー・ライドンは、アーレンをはじめ現地でのアメリカ人との交流を「…モントレイ湾地域の日本人移民は、アメリカ人の友人や協力者がいなかったら、外国人として攻撃されることに対応できなかつただろう。当時、アメリカ人が日本人と友人となるには勇気が必要だった。日本人の友人となることは、『ジャップ好き』と呼ばれ、裏切り者呼ばわりされる危険を冒すことであった。排日の炎が燃え盛る白人社会では、単に日本人に土地を貸すことさえも、非常に勇気のいることだった。それでも、日本人を守ろうとする弁護士や、共同で事業を行おうとする事業家など、多くのアメリカ人が日本人の友人となった…」と述べている。

また、研究者らの学問的な対応では、「…岩瀬に鮑がないのは日本人海人が深海の鮑を枯渇させているからだ」と地元民は信じ込んでいた。スタンフォード大学の動物研究者は、1917年に行った調査で、潮間帯の鮑がいなくなったのは観光客と地元住民が獲っているためだと結論付けている。日本人海士(ダイバー)が犯人ではなく、鮑は絶滅の危機に瀕してはいない、とこの動物研究者は述べている…」と指摘している。

1911年にカリフォルニア州は鮑を死骸または殻から出して陸上に持ち込むことを違法にし、1913年にはカリフォルニア州が鮑を州外への出荷を違法にした。そして、1915年にカリフォルニアでの鮑乾燥は違法、鮑の殻や肉の州外出荷は違法となり、1921年、カリフォルニア州は1月15日から3月15日の間に採鮑することは禁止された。このように次々に採鮑業を規制していく状況になっても、日本人鮑漁師たちがある程度規制を甘んじて受ける姿勢をみせていたのは、鮑資源を保護する重要性を理解していたからではないかというサンディー・ライドンの指摘は、まったく新しい視点であり注目される言葉である。

現在、モントレイの地域関係団体でポイントロボスのガイド活動をしている「ポイントロボス財団」HPでは、「ポイントロボスの歴史」のなかでも源之助ら渡米鮑漁師たちの歴史的事実をどのように説明しているか要約して紹介する。

「ポイントロボスの歴史」の項目「アワビの収穫」…アワビの殻の破片が散らばっているのを見つける可能性が高い…岩の多い海岸は、この筋肉質の軟体動物に最適な生息地…アワビの肉は長い間多くの文化で珍味と見なされ…殻は真珠層の家具の象眼細工や宝石やボタンの製造として高く評価…オローニ族がポイントロボスにアワビを集めている間、それが商業的に収穫…中国人が 1850 年代初頭に到着するまではありません…1890 年代半ば、日本の若い海洋生物学者である小谷源之助がポイントロボスに到着し…アワビの豊富な繁殖地の報告を調査し、すぐに故郷の千葉の村から労働者を派遣し…ホエラズコーブの北東側にある石炭シュートポイントに…設置された木製の棚で、海岸近くのアワビを収穫し、天日干し…浅瀬のアワビの供給が減少するにつれ、労働者はヘルメットをかぶったダイビングスーツを着て、ボートに乗って深海に出かけ…ポイントロボスの日本人は、手動ポンプを使用してダイバーに空気を供給し、最終的にカリフォルニア海岸の上下に広がる業界を開拓…1899 年頃、小谷は現在保護区を形成している不動産を購入したアレクサンダー・アーレンと提携し、現在のホエラズコーブの駐車場にアワビの缶詰工場を設立し…大成功を収め、最終的にカリフォルニアで販売されたアワビの 75%を占め…缶詰工場は 1928 年まで操業を続け、1933 年に州の保護区となったときに解体…小谷家は石炭シュートポイントの近くにあり、保護区の地図には小谷村として示されています…」という説明である。

歴史的な流れは大筋で理解できるが、1994 年に新聞『ヘラルド』が「小谷の世界」を掲載した内容からみて、今日までサンディー・ライドンやティム・トーマスの調査研究などが進展して、さまざまな事実を掘り起こした成果が反映しているとは言い難く、日本人の渡米鮑漁師たちがモントレイの地域史に位置づけられていない状況を感じる。それは日本側も同じような状況なので、あらためて日米共同による調査研究を進めて、これまでの歴史的事実を再検討しつつ、今日的な歴史的な意義を深めていく必要があると思っている。

8. 大島四郎著『安房の潮左為』からみる小谷兄弟と A. M. アーレン

米国カリフォルニア州のモントレイ半島周辺は、海藻が豊かな海で本格的な鮑漁がなく大量の鮑が存在していたという。佐賀県出身の移民野田音三郎やサンフランシスコで雑貨店を開いていた静岡県出身の井出百太郎が鮑漁に着目し、農商務省を通じて専門家の渡米を依頼したことから渡米鮑漁師たちは誕生した。

千葉県の本根で器械式潜水による採鮑や乾鮑製造の事業を営んでいた海産物問屋金澤屋の小谷清三郎のもとで、鮑漁に関わる水産知識や技能、とくに乾鮑製造などに携わっていた源之助・仲治郎兄弟は、1897（明治30）年農商務省からの要請で渡米したとされる。だが、水温の低いモントレイ半島周辺、とくにポイントロボスにおいて小谷兄弟らは、器械式潜水具を導入して採鮑漁に成功したものの、乾鮑製品にして中国や日本への輸出は、アメリカ人の理解が得られなかった。日本人の採鮑漁が厳しく規制されていく状況を打開するために、小谷兄弟は鮑漁のあり方を研究し、現地の理解を得る方策をさがしていたという。そのなかでポイントロボスの実業家 A・M・アーレンは、小谷兄弟の採鮑漁への熱意や高い水産知識に接するなかで、乾鮑ではなく鮑缶詰にする共同事業の提案に賛同したといわれる。排日の嵐のなかでアーレンの資金や援助なしに源之助・仲治郎兄弟の器械式潜水による採鮑魚や鮑缶詰の事業はなかったのである。

以上のような経緯を記録した仲治郎の資料が少しでも遺されていれば、調査研究が違ったものになっただろう。ただ、仲治郎の二女美枝の夫である大島四郎が手書きしたものであるが、『安房の潮左為』（私家版・1983年）という表題で義父仲治郎の生涯を作成していた。出版されることなくコピーしたものが何部か製本され、今日まで遺されてきた。実際、大島が仲治郎から直接、証言を得たものや、自身の体験はじめ家族や関係親族から見聞いたものなので一級の史料といえる。ただ、仲治郎が1943（昭和18）年に亡くなってから40年近く経っているため、大島自身がかつての証言や見聞体験などの記憶を丁寧に取り上げてはいるが、裏付けのある資料をさがしての執筆とのことで、当時資料を手に入れるのは今とは違い難しかったものと推察する。

なお、大島は1929（昭和4）年、早稲田大学高等師範部在学中の夏休み、出身中学校の後輩たちを連れて房州一周キャンプ旅行をおこなったとき、キャンプ地になった七浦村で仲治郎と出会ったという、そのことがきっかけに翌年、七浦小学校の代用教員として赴任することとなった。村の学務委員であった仲治郎には下宿として長性寺を紹介されるなど、その後も懇親が深まっていき、1935（昭和10）年には、仲治郎の二女美枝と結婚したのである。大島が七浦村に来た1カ月程前、1930（昭和5）年7月1日に63歳の源之助はカーメル病院で亡くなっている。8月に仲治郎と出会った後に、大島は礼状を出し、そこに「…あの海外雄飛のお話はまったく胸をうたれ…万里の波濤のかなた、遠い異境で健闘された七浦出身の方々…移民法案の記憶と新たな北米カリフォルニアにおける移民に関するお話などもっともっとお聞きしたい思い…」と書いたと述べている。仲治郎は出会ったばかりの学生であっても自宅に招いて歓迎する人柄であり、暗雲立ち込める国内外の政治情勢のもと、渡米体験を若者に伝えたいとの思いをもっていた人物であった。

さて、『安房の潮左為』では、第5章「アメリカにおける軌跡」のなかに仲治郎を中心とした渡米した鮑漁師たちの動きが描かれ、なかでもマクミラン・アレキサンダー・アーレンのことが数多く紹介されている。大島が仲治郎から直接、聞いた渡米10年間の話の多くは、アーレンとの出会いと共同事業のことであったのではないかと思われる。第5章の構成は、第1節アーレンとのめぐりあい、第2節アワビ漁業の罐詰会社の創立、第3節モントレイ湾のアワビ、第4節創業の苦心、第5節兄源之助の渡米と兄弟の協力、第6節邦人潜水夫の渡米、第7節日露戦争当時のこと、第8節

帰国、第9節アーレンとの惜別、第10節赤毛布(げっと)、第11節アメリカ講、第12節業績追慕、となっているが、それぞれの節ではアーレンに関わることが中心に扱われているので、大島の記憶には数多くの言葉が残ったと推察している。

仲治郎の生涯を描くことになった動機として、大島は第5節「兄源之助の渡米と兄弟の協力」のなかに、「…異国で事業をはじめるとあって仲治郎は兄の源之助を日本から招き、兄弟力を合わせて、冒険ともいふべき異国における創業の難事にあたった…」とし、「…源之助がいつアメリカに渡ったのか、その正確な月日はわかりかねるが、仲治郎は事業をおこすにあたって兄との協力を考えたものと推考されるので、源之助の渡米は事業発足の直前か、またはその直後のことであったと思われる…」と、大島はまだ小谷兄弟渡航の旅券下付記録があることを知らなかったと思われる。

ゆえに「…異説もある。その一つは『大場俊雄氏』の説である。同氏は米国における邦人のアワビ漁業について研究し、『米国のアワビ漁業における潜水技術を導入した小谷源之助と千葉県出身の漁業者』と題して、その研究結果を発表しているが、その中で、同氏は『先に渡米してアワビ漁業に従ったのは源之助であり、仲治郎は遅れて渡米したもの』として、『…モンレー湾のアワビに着目した井出という日本移民が、日本の農商務省に、アワビ漁業の専門家の人選と派遣を依頼した。それによって選ばれて渡米したのが源之助で、弟の仲治郎はその後、兄を頼って海を渡ったもの』としていることに、「…この説には疑問点があって、私としては納得しがたく思われる…」というのである。

大島は「…農商務省から選ばれたのは源之助ではなくて、弟の仲治郎であったと思われる…農商務省の推薦と養家の類焼という不測の不幸事が重なって、渡米を決意し実行するにいたったものではないか…」と語るだけではなく、「…このことにもまして大場説を疑わしく思う理由は、仲治郎の生前、私は何度かにわたって直接本人から『渡米してアーレンの協力を得てアワビの会社をおこし、兄をよんで一緒に仕事をした』と聞いていることである。謙虚で、自己宣伝めいたことが嫌いであった仲治郎が、そして兄弟仲がよく兄思いであった仲治郎が、兄の業績を自分のものとして人に語るということなどはまったく考えられぬことなのである…ことの真実だけは記しておきたいと思う…」と、「ことの真実だけは記しておきたい」と強く主張している。それは仲治郎本人から直接聞いたという自負があって強調しているのである。

そのことで仲治郎本人が本当に「渡米してアーレンの協力を得てアワビの会社をおこし、兄を呼んで一緒に仕事をした」といったのであろうか。ここで考えられることは、大島の記憶でいっている『兄を呼んで』の一言は、モンレーとポイントロボスという採飽場所の思い違いであって、渡米に関わる一言ではなかったのではないか。

源之助は当初、モンレーのパシフィックスグローブにいた野田音三郎のもと素潜りでの採飽魚をし、鮑の調査活動を担った仲治郎はモンレー半島周辺やカーメル湾、とくにポイントロボスなどに足を運んでいたのではないか。そんななかでポイントロボスではアーレンと出会ったことで、鮑を加工する会社の話となり、モンレーにいる源之助をポイントロボスに「呼んで一緒に」アーレンと仕事してはどうかという話になったのではないか。後述でも大島は「…モンレー湾に臨むポイントロボス（ロサンゼルス市の南方。モンレー半島にあり、モンレー市に属す）…」と、地理的に間違っただけで把握している。

野田音三郎に関わる文献や資料などでも、モンレーとポイントロボスの採飽場所の違いが明確になっていないことで、混乱をおこしているものがあつた。大島も仲治郎の言葉を理解するうえで、現地のことを知らないことでの思い違いがあつたかもしれない。

いずれにせよ、もし仲治郎自身が「…アーレンの協力を得てアワビの会社をおこし…」と語ったのであれば、この点を検討しなくてはならないと思う。源之助は「…弟と力を合わせて創業…仲治郎が帰国した後は弟に代わって一切の責任を買って会社の経営にあたった…」とし、明治 39 年に「仲治郎の帰国した後、会社のたどった道はけっして平坦なものではなかった…大正期に入るや、日本人排斥のあらしは全州に吹きまくり、大正 12 年にはついに排日法案が成立…邦人関係の事業が次々と倒産してゆく苦渋にみちた時代を彼の会社は耐え抜いた…日本から潜水夫を呼ぶことを認められるという特別な例外措置までうけて、やがては社運の隆昌期を迎えるにいたった…主として源之助の努力と手腕によるもの…その業績は不滅のもとして高く評価すべきである」と、語っているので、大島は第 2 章で取り上げた源之助の「陳情書」の存在は知っていたのか。

「アーレンとのめぐりあい」のなかで大島は、「…アーレンはアメリカにおける仲治郎の無二の知己であり、その理解と協力なくしては仲治郎の成功は考えられない、といっても過言ではないといえる…アーレンと仲治郎が結びついたのは水産物に関する仲治郎の博識であった」という。そして、続けて「…あるとき加州海岸で大学生たちが魚介類の調査研究を行っていた。たまたまその海岸にいわせた仲治郎はその様子をながめていたのであるが、採集された貝の名や分類がわからず学生たちがしきりに論議しているのをみて、彼は明快に説明して学生たちを驚かせた。つづいて不明の魚介類がでると、学生たちは仲治郎の意見をもとめる。仲治郎は迷うところなくテキパキと回答し引率指導の教授たちをして顔色なからしめた…」との記述があった。この出来事については、第 5 章のなかで取り上げたが、モントレイにあるスタンフォード大学ホプキンス臨海実験所での研修会のことと思われ、実際にポイントロボスの海岸において仲治郎やアーレンらが学生や教員たちと出会った可能性は高い。「この出来ごとによって『おそるべき篤学の日本青年』として、アーレンは仲治郎に対して強い関心をいだき、やがて二人を強く結びつける…」ことになったのだろうと大島は捉えている。

アーレンは「…カリフォルニア州のモントレイ地方の大地主であると共にアメリカにおける著名な建築設計家で、その設計によってつくられたすぐれた建造物はアメリカ国内にいくつも残されているという（筆者もいくつかを聞いていたが、残念ながら失念してしまった）アーレンは建築家としてすぐれていただけでなく、人間的にも気宇宏大にして信義にあつい高潔な紳士で…仲治郎が異境において、この人と会うことが出来たのはまことに幸福なこと…」と、大島は仲治郎の人生のなかで、アーレンという人物の存在を大きく位置付けた。

「アワビ漁業と罐詰会社の創立」の節では、源之助ではなく仲治郎がいたからこそ、アーレンとの共同会社の設立が可能であったという主張が大島の記憶に残っている真実とわかる。その経緯は「仲治郎は心中ひそかにねっていた自分の計画をアーレンに話して…カリフォルニアの沿岸の無尽蔵とも思えるほど豊富なアワビを採取して、アメリカ人の食膳にのせようとする計画…熱意をもって縷々、その抱負を説き、アーレンの批判を乞うた…仲治郎の計画をよく理解…実施にあたっては協力を惜しまぬこと…アーレンの出資と協力によって仲治郎の計画は実施された…ポイントロバス…に『ポイントロバス・キャニング・カンパニー』という名の会社が創立され、事業が開始された」という。「出資者と名義人はアーレンであったが、その経営に関することのいっさいは仲治郎にまかされ…『金は出すが、実際の仕事については口を出さない』、これが二人の間にかわされた紳士協約…」ということを仲治郎は、大島に伝えたかったのではないだろうか。大島は会社設立の年月は「おそらく明治 33、4 年のことであったと想像」といっているので、会社関係の資料は持っていなかったようだ。

「モンレー湾のアワビ」では、「ポイントロバス…モンレー半島の根元に位するモンレー市に属する海岸地…」と、大島は思い違いをしている。仲治郎から「…源之助一家に邦人従業員を加えてうつつした源之助邸での記念写真の何枚か…」を見せてもらったときに、ポイントロバスやアーレンなどについての話題が上がったのだろう。「…はじめてこの地を視察した仲治郎は、岸のすぐ近くの磯に、日本ではとても見られぬような大きなアワビがごろごろしているのを見て驚嘆したという。大正になってから仲治郎にすすめられて器械潜水夫として、ここで働いた七浦村千田の高橋源之助は、『ポイントロバスの沖合は米国太平洋沿岸ではアワビの宝庫。7～8メートルの海底にもぐると、殻の長さ20～30センチ以上の、日本ではお化けのような大きなアワビが岩の上でたくさんとれた。日本の潜水夫が専門にこれを採取、1日1人4、500キロはとれた。』（サンケイ新聞、昭和39・12・20）と語っている」ことを記述し、大島は「…アワビは日本のそれとは比較にならぬほど大きく、かつ豊富であった…宝庫にめぐりあう…アーレンの知遇を得たことはまことに幸福なこと…」であり、それとともに「…大きなアワビの殻を器用な日本の従業員たちは、余暇を利用してはヤスリでみがいて飾りもの…まことに美しく…殻はこまかにきられて細工されて、見事なカウスボタンやブローチなど…」にした取り組みも紹介している。

「創業の苦心」の節では、「…仲治郎の創業の苦心は容易ならぬもの…アメリカ人はアワビを食べることを知らなかった…アワビはいくらでもとれた。しかし、これをうりさばかなくては会社の経営は成り立たない。販路の開拓、それはアメリカ人にアワビになじませ、これをその食膳にのせる…そのためにはいかにすべきか…創業時の仲治郎に課せられた大きな課題…ねばり強く、調査研究…種々試行錯誤を重ねた末に、アワビの缶詰をつくり、さらにスライス（うす切り）にしてみたところ、これが成功して突破口となり、アメリカ人もようやくアワビに親しみ、やがては生アワビもその食膳にのせられるにいたった…」という。「…若さ情熱をかたむけての仲治郎のねばり強い努力が見事に実をむすんだのである。大げさにいえば、彼のこの成功はアメリカ人の食習慣の新開拓、食膳の改善である…」と、大島は仲治郎の業績を評価し、さらに「…徒手空拳入国した日本の若人が事業をおこし、これを軌道にのせ成功させることは、たとえアーレンの力強い協力があったとしても、誠に容易ならぬ至難なことで…仲治郎は見事にこれをなしとげたのである。思えば実に痛快事であり、不滅の業績…」と語るものの、具体的にどのような活動の結果なのかを裏付ける資料は示されていない。

「兄源之助の渡米と兄弟の協力」のところでは、「大場俊雄」説への疑問を解明していくことを執筆の動機にしていると大島は記述している。再度取り上げるが、「…大場説を疑わしく思う理由は、『仲治郎の生前、私は何度かにわたって直接本人から』…真実だけは記しておきたい…」と語っている。その言葉には重いものがあり、仲治郎の事績を伝えたいとの思いには強いものがある。

「邦人潜水夫の渡米」では、「…仲治郎が創立したポイントロバスのアワビ会社において、アワビを採取したのは彼が日本の房州から呼びよせた漁師たちであった。はじめのうちは岸辺の浅いところでもいくらでも採れたモンレー湾のアワビも…漁場は次第に沖の方に移り、漁法も裸のままでする「素もぐり」から潜水器具を使う「器械もぐり」に変わっていった…」までは経緯はわかるが、なぜか「…「素もぐり」から潜水器具を使う「器械もぐり」に変わって…」といったかの説明がない。うえに、「…アメリカ人はじめカリフォルニア州に住む多くの国の移民たちは潜水器に慣れず、その技術を身につけた者はきわめてすくなかったので、仲治郎は故国の房州からはるばる潜水漁夫を呼びよせ…」というのは、モンレーやポイントロバスで器械式潜水の採鮑が始まったことを、仲治郎からはそれほど聞いていなかったのではないかと暗示させる。

ただ、七浦村にもいた大島は「…仲治郎が帰国した後も兄源之助にひきつがれ、増員や帰国などによって出来た欠員補充のために次々と適任者が選ばれて房州からポイントロバスにおくられていた。帰国後の仲治郎が源之助の委嘱をうけて、その人選から渡航までの一切のことにあたったということ…」は、身近なこととして知っていたのである。

排日の嵐の中であって、大島は仲治郎がよく口にしていたことは「…ポイントロバスのアワビ会社の潜水夫だけは例外とし、特別措置によってひきつづき入国を認められた…潜水器械によって海底のアワビを採取…『器械もぐり』が日本人の特別技能に認定された…異例ともいふべき特別措置は…アーレンの懸命な努力によるもの…」との深い感謝の言葉であったという。

「帰国」のころでは、仲治郎の帰国に関する旅券下付年月がまだ不明で「1907（明治40）年」となっている。その後、1906（明治39）年が帰国の年と判明している。

「…仲治郎は日本に帰国した。ときに33歳。明治30年に渡米してより10年、その間、事業に没頭して一度も故国の土を踏むことのなかった…アワビ会社（ポイントロバス・キャニング・カンパニー）を設立して年なお浅く、かついまだ33の壮年の彼がなぜ帰国するに至ったのか、その理由はさだかにはわかりかねるが、その主な原因は故国の留守宅の事情にあったのではなかったか…」と、大島は推察している。「…仲治郎が事業に没頭している間に、故国に残してきた妻の美わは苦しい立場に追い込まれていた…美わの妹たち（美わは七人姉妹の長姉であった）は…いつ帰ってくるかもわからぬ不実ものと仲治郎を非難…美わに対する離婚のすすめとなった。美わがその勧告を聞こうとしないと妹たちは『姉妹の縁をきる』とまで言い出し…事情を知った仲治郎は事態解決のために帰国を決意したと思われる…」と述べている。このころの経緯は大島が関係者から証言を集めたのであろうか。仲治郎の証言とは考えられない。

「…後事のいっさいを兄源之助とアーレンに託して帰国の途についた。帰国後の彼が源之助の要請をうけては優秀な潜水夫を選んでポイントロバスに送っていた…源之助に協力して会社の発展のために心を用いていたが、彼自身は再び太平洋を渡って、なつかしいモントレーのちを踏むことはついになかった」。そして、「…責任者として会社の運営に専念していた源之助は1930（昭和5）年、モントレー病院で没した…ポイントロバスのアワビ会社は源之助の死と日米関係の険悪化によって、仲治郎の創業以来およそ40年の昭和14、5年のころ廃業されるにいたった。房州から働きに来ていた潜水夫たちもみな帰国した…」

「アーレンとの惜別」の節では、大島は「…名残りのおしまれたのはアーレンとの別離であった…アーレンは異境のアメリカ合衆国における仲治郎の無二の理解者であり努力者であった。若い仲治郎がいかにか水産に対する造詣が深く、経営の才があったとしても、異国において冒険ともいふべきアワビ漁業に成功することができたのは、アーレンの協力…なくしては彼の成功が考えられぬといっても過言ではない…二人の間の結びつきは年齢を越え国籍をはなれて、年とともに誠に深いものがあつた…」と記述した。その後、二人が深く胸に刻んだ友情と共生の精神をもった日米交流は消え、悲惨な戦争の時代と向かっていく。そして、渡米した鮑漁師たちの歴史も消えていったのである。

今回、『安房の潮左為』で紹介したところは一部分である。大島四郎は教育者として『安房の潮左為』を世に出すにあたって、小谷仲治郎の生涯を顕彰するだけでなく、渡米した鮑漁師の歴史を通じて、安房の地域史を豊かなものにしたと願ったのではないか。平野家文書とともに後世に向けて紹介していきたいと思っている。

本報告は『明治期に渡米した房総アワビ漁師たちの源流～小谷源之助・仲治郎兄弟と金澤屋の人

びと〜』の続編として記述したものである。前報告では、「平野家文書」を紹介する程度の部分的に限られていたので、小谷源之助・仲治郎兄弟が渡米する背景や現地での動きは他の文献の引用になっていた。

それらのなかで早めに報告する必要がある事項は、内容が不十分であっても追加した方がよいと考え続編を書いた。明治期、米国とは様々な分野で交流が進むだけでなく、日本からの移民が増えたことで排日問題がおこり、鮑漁師たちも大きな影響を受けながら、現地の人びとと向き合って事業を続けていった。

明治期に渡米した房総鮑漁師たちの歴史は、日米の交流史においてどのような位置づけとなる出来事といえるのか、また安房の地域史にどのような一石を投じていった出来事になったか、今後ともさぐっていきたいと思っている。

【二つの報告はNPO法人安房文化遺産フォーラムHP
(房総アワビ移民研究所HP) に掲載してあります。】

明治期に渡米した房総アワビ漁師たちの源流

2022年5月改

～小谷源之助・仲治郎兄弟と金澤屋の人びと～

NPO 法人安房文化遺産フォーラム 愛沢 伸雄
(房総アワビ移民研究所 研究チーム)

0. はじめに	1
1. 明治の長尾村根本	2
2. 海産物問屋・金澤屋と『長尾村誌』	5
3. 根本で始まった潜水器採鮑漁と森一族	7
4. 「慶應幼稚舎」で学ぶ源之助と横浜・清水屋	10
5. 乾鮑製造と小浜「器械根」の採鮑漁	14
6. 清国との海産物貿易と水産伝習所創設	18
7. 金澤屋と海産物商人～萬屋・伊豆屋・石福	21
8. 水産伝習所で学ぶ仲治郎～明治23-24年	25
9. 金澤屋を支えていた人びと	30
10. 佐渡の森知幾と源之助の活躍	37
11. 源之助の「逃亡」事件とよばれた出来事	42
12. 磯焼けと根本での調査・「あわび研究」	45
13. 源之助・仲治郎兄弟が渡米にいたるまで	48
14. 金澤屋の女性たち	53
15. 明治女学校のひでと画家倉田白羊	61
16. 清三郎の死去と仲治郎	65